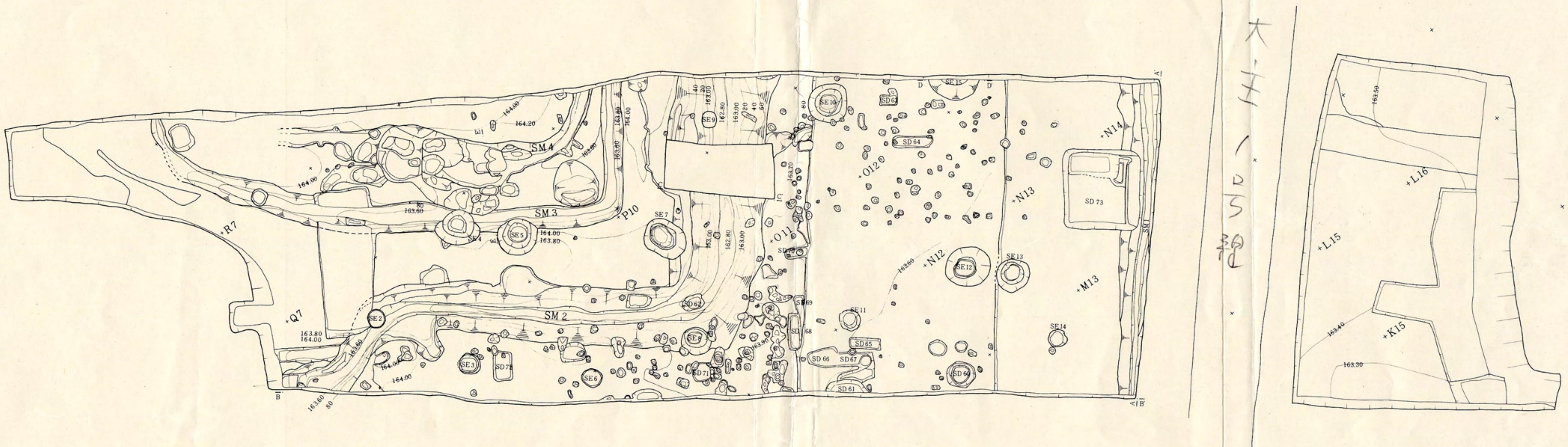


SM4
SM3
SM2
P10
R7
Q7
O11
O12
N12
N13
N14
M13
L15
L16
K15
SE2
SE3
SE4
SE5
SE6
SE7
SE9
SE10
SE11
SE12
SE13
SE14
SD 64
SD 73
SD 65
SD 66
SD 67
SD 61
SD 62
SD 71

第206図　L区全体図

6．L　　区

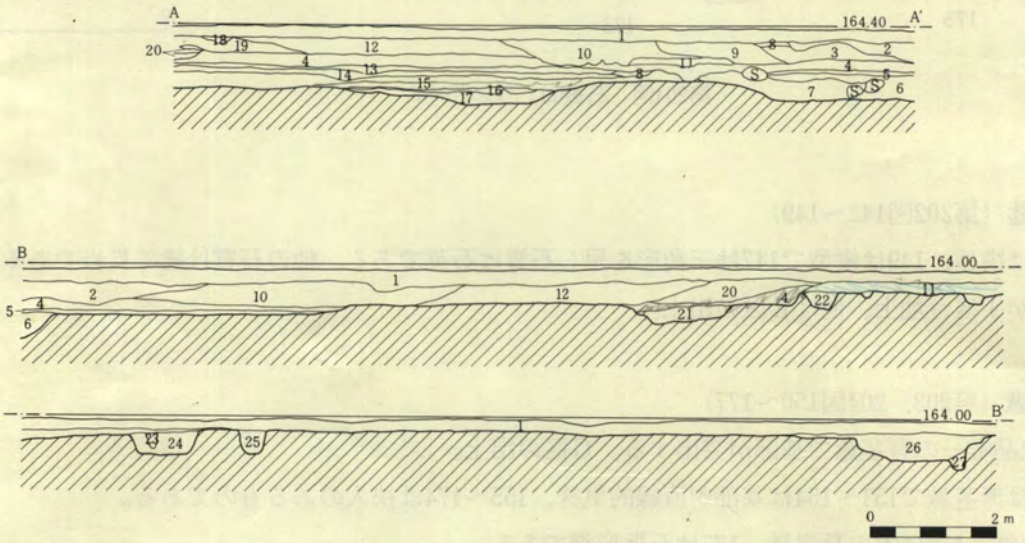
L区の状況

K区より舌状台地の東端は、土抜きにより整地され、水田を挾んで町道大主１号線が通過している。樋越字西前沖地区の調査区北方は、御倉屋敷等の屋敷名が残り、大胡城主牧野康成公の重臣である稲垣氏の屋敷址と称される丁田城（稲垣屋敷）にも近い地である。

調査は、土抜きによってローム基盤を露呈している耕作地東の水田下に遺構の存在を求め、トレンチを設けるが、水田下30cmほどでローム面を検出し、落ち込みの存在を確認した為に、大主１号線の西脇まで拡げ、ローム面と遺構の追求の為、東側にも調査区を設定。その結果、遺構は、大主１号線西脇に並走して南方に流下する水路下に検出されたSMIを東方の限界とし、ローム面は、東脇７m前後まで追求するが、遺構は検出されなかった。

L区東壁セクション土層について（第206図）

調査区東壁及び南壁のセクションにより、現水田下に旧水田（Ⅰ～Ⅴ）そして現況の水田面を整地す



第205図　L区東壁、南壁土層図

L区　東壁・南壁セクション土層説明

1	灰暗褐色粘質土	（水田Ⅰ）
11	〃	（水田Ⅱ）
4	〃	（水田Ⅲ～Ⅳ）
5	灰暗褐色粘土	
13	暗褐色砂質土	
14	暗褐色粘土	
2←3←8←9←10←12←19←20は埋土		
暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む		
6．17	黒褐色粘質土	（SM１）
7	黒褐色粘質土	砂質分を含む
15	黒褐色粘質土	（水田Ⅴ？）
16	暗褐色粘質土	少量のローム粒・ロームブロックを含む
18	攪乱	
21	黒褐色粘質土	班点状にロームブロックを含む
22．23．25．27	暗褐色土	ローム粒を含む
24．26	暗褐色土	班点状にロームブロックを含む

る為に埋土された状況を観察することができた。

埋土は、ローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土で、旧水田III～IVを東方～南方向方に順次埋め始め、調査区の南東隅までその状況が把握できる。

旧水田は、その整地化に底面を安定すべく、ローム面の二個所にその痕跡を残す。N13Gポイント西側と　SE13の西側に施された比高差20cmの段差、SE10西側を通過する同比高差を測る段差であり、N-38°-Eの軸を両方が呈している。

これらの結果より、居住等の遺構が廃絶後、土層11、4等の水田を営み、台地沿辺の土壌を切り崩して整地し、現水田面を整えたのであろう。

(1)　検出した遺構と遺物（第205～229図）

検出された遺構は、溝状遺構(SM 1～4)、井戸址(SE 2～15)、円形土坑、竪穴状不明土坑、柱穴等である。

検出された遺物は、肥前系(唐津、伊万里)・瀬戸美濃系の日用雑器、焙烙、土釜、砥石、臼、硯等で、中国青磁が1点出土した。

溝状遺構

SM 1

大主1号線の西脇に検出され、その走向主軸は、水田整地に伴うと考えられる段差とほぼ同軸を呈している。最大幅1.6m、深さ0.4m、底面幅30cm前後で安定した幅を測る。

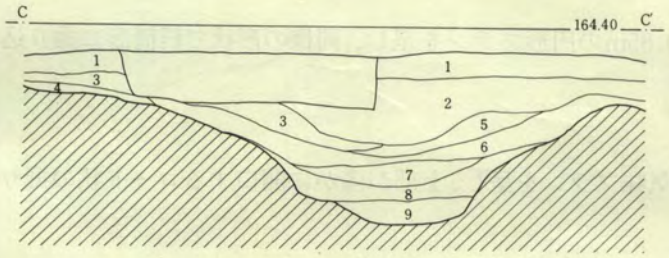
断面形は、底面より開口して立ち上がり、上部ではかなり緩慢な傾斜で広がる。覆土は、黒褐色粘質土で、部分的に砂礫層の混入が認められる。

出土遺物は、炮焙片、摺鉢片、かわらけ、陶器類であった。

SM 2　(第207図)

調査区中央部より西方において検出され、調査区中央北壁より、ほぼSM 1と同様の軸で南西に走向し、SE 8付近で直角に折れ、N-52°-Wの軸となる。さらに、SE 2付近で西南西方向に折れる。

規模は、調査区中央北壁部で、上場4.6m、下場0.6m、深さ1mほどを測る薬研堀状の断面形で、N-52°-Wの軸を呈する中央部付近では、上場が2.5m、深さ0.6m前後となり、調査区南西隅に連れて上場、深さも数値を減らしている。覆土状況より、砂質土の推積が暗褐色粘質土と互層になり、水堀状となっていた可能性を示唆し、上層は、人為的に埋められたと考えられる部分がある。



SM 2 土層説明

1　灰褐色粘質土　　現水田

2～6　暗褐色土　　ロームブロックの混入度による違い。

7．9　暗褐色粘質土

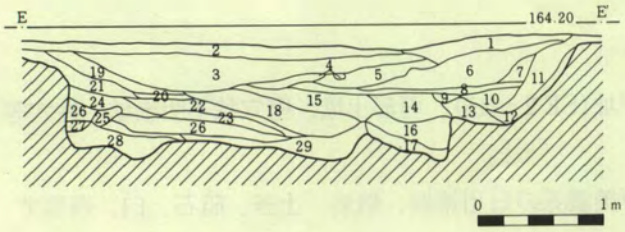
8　暗褐色粘質土と砂質土の互層

第207図　SM 2 土層図

出土遺物は、陶磁器、かわらけ、土鍋、砥石等で覆土中にて検出された。

SM 3・4R（第208、229図）

SM 3 と SM 4 間は、幅広い掘り方で結ばれ、掘り込み覆土の除去後に検出された。SM 3 は SM 2 に似る走向を一部呈しているが、トレンチ部より緩やかに北方向に弧状を描いてカーブする。最大幅部で、上場1.5m、下場0.6m、深さ0.7mほどを測る。SM 4 は、Q10Gポイント付近では弧状を描くが、西方部ではSM 3 と並走気味に走向する。残存良好な調査区北壁部で、上場0.75m、下場0.55m、深さ25cmほどを測る。



第208図　SM 3 、4 間掘り込み土層図

SM 3・4 間掘り込み土層説明

1．2　灰褐色粘質土　水田
3　褐色粘質土　全体に砂質分を含む
4　ロームブロック
5　褐色土　ローム粒・カーボン粒含む
6　暗褐色土　班点状に少量のロームブロックを含む
7　暗褐色土　6 層よりも暗い
8．18．23　褐色土　班点状にロームブロックを多く含む
9　暗褐色土　パサパサ
10　暗褐色土
11．12　褐色土　ロームブロックを含む
13　褐色土　粘質を帯びる
14　暗褐色土　ロームブロックを含む
15．16　褐色土　粘質を帯び、ローム粒・ロームブロックを含む
17　にぶい黄褐色土　粘質を帯びるロームブロックを含む
19　褐色土　砂質気味
20．22　暗褐色土　粘質を帯びる
24．26　褐色土　ローム粒を含み砂質
25　粘質のロームブロック
28　にぶい黄褐色土　粘質を帯びる
29　灰褐色粘土

井戸址

本調査区で検出された井戸址は、14本を数える。総てが素掘りのものであった。形状は、円形と楕円形プランに分かれ、円形を呈するものは、1 m弱の直径を測り、円筒形の掘り込みであった。楕円形を呈するものは、上部が開口するロート状の掘り込みである。

SE 2

P 7 GでSM 2 内に包括される。直径0.8～0.85mの円形プランを呈し、同様の形状で円筒形に掘り込まれ、深さ2.5m前後で湧水にあたる。

SE 3

O 8 Gに検出。長軸1.02×短軸0.95mの円形気味プランを呈し、上部が僅かに開口するロート状の掘り込みである。

SE 4

P 8 Gに検出され、SM 3 によって切られている為に、北東部の上場が残存しない。残存部の上場で最

大幅2.05mを測る。掘り込みは、ロート状を呈し、深さ2.20mほどで底面に至した。

SE 5

SE 4 の東側に隣接し、SM 3 によって北東部を切られている。プランは、1.8mほどの円形気味のプランとなろう。掘り込みは、ロート状を呈し、深さ2.10mほどを測る。

SE 6

N 8 Gの北東隅、O 9 Gのポイントにかかり検出。長軸0.94×短軸0.85mの円形気味プランで、深さ2.7mほどを測り、円筒形の掘り込みであった。

SE 7

O10Gに検出され、その一部が SM 2 の西側上場にかかる。長軸2.05×短軸1.73mの楕円形を呈し、ロート状掘り込みであった。覆土下層より、宝篋印塔の笠部が出土した。

SE 8

N 9 Gの東辺にかかり、SM 2 にその全体が包括されて検出。長軸1.38×短軸1.28mの円形気味プランを呈し、ロード状掘り込みで、深さ2.4m前後を測る。

SE 9

P11Gの南西、SM 2 にその全体が包括され、SM 2 よりも古い所産である。70cm前後の直径を測り 1 m前後ほどを掘り下げるのがやっとであった。

SE10

O12Gにその主体を占め、僅かにO11Gにかかり検出。長軸1.85×短軸1.75mの円形プランを呈し、ロート状掘り込みで、深さ2.1mほどを測る。

SE11

M11GとN12Gに跨がり検出。90cm前後の直径を測る円形プランを呈し、深さ1.2mほどで底面に達してしまった。底面は北寄りに深く、作業途中で棄棄したものであろう。

SE12 （第210図）

M12Gの北西隅に検出。長軸 2 ×短軸1.83mの楕円形プランを呈し、ロート状の掘り込みである。深さは、2 mほどを測る。

SE13 （第210図）

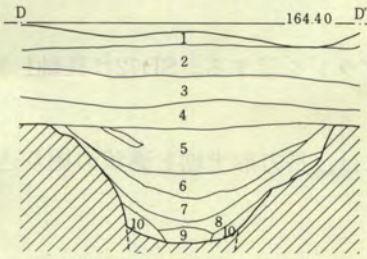
M12Gに検出。1.5m前後の円形プランを呈し、片寄りのロート状掘り込みで、深さ2.1mを測る。

SE14 （第210図）

L12Gに検出。0.8m前後の円形プランを呈し、円筒形の掘り方を呈する。深さ1.2mほどである。

SE15 （第209図、S 1 ：60）

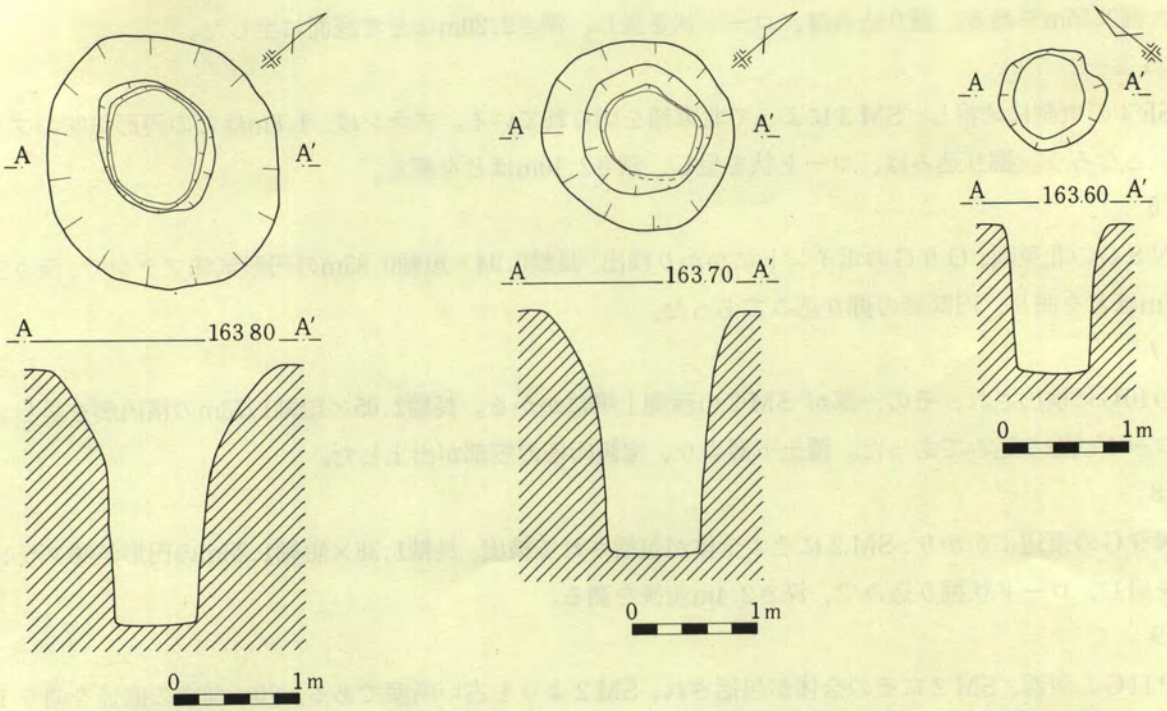
O13Gに位置し、その大半が調査区外に占める。確認できる長軸長は、2.3m、深さは確認面より1.8mほどまで追及できた。上層覆土よりスラグを検出した。



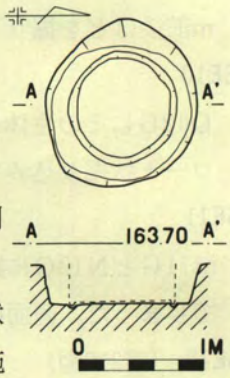
第209図　SE15土層図

SE15土層説明

1．2	灰褐色土	現水田	6	黒褐色土	ローム粒を混える。
3	暗褐色土	班点状にロームブロックを多く含む	7	暗褐色土	ローム粒を混える。
			8	暗褐色土	上層より明るい
4	灰褐色粘質土	旧水田	9	褐色土	サラッとしている
5	黒褐色土	スラグを含む	10	褐色土	ローム粒混える



第210図　SE12、13、14平面図



第211図　SD60

円形土坑

SD 60（第211図）

L11、M11Gに跨がり検出された。長軸長1.33×短軸長1.20m、残存壁高23cmを測る楕円形プランを呈する掘り方である。

平坦な底面内には、幅6cm、深さ4cm、最大直径90cm、最小直径86cmのリング状掘り込みが残る。樋状の埋置をした痕跡と考えられ、掘り方と埋置間に裏込めを施し、樋状の埋置の安定を謀ったのであろう。出土遺物は皆無であった。

その他、SD61は、調査区南壁に僅かにかかり検出。SD62は、SM 2内に検出され、長軸長1.05m、短軸長0.65mを測る楕円形で、石臼が出土した。

長方形土坑（S D63～70）

SD63～67、SD70は、N-51°～64°-W間にその主軸を呈し、SD68・69は、N-25°～33°-E間の主軸となり、90°前後の角度差を測る。規模は、長軸長が0.8～1.85mとばらつくが、短軸長は、50～60cm前後と画一的である。

方形土坑（SD71～73）

SD71は、長軸長0.9×短軸長0.8m、深さ30cm前後を測る正方形気味プランを呈する。SD72は長軸1.3m、短軸0.65mで長軸長がN-35°-Eを呈する。

SD73は、一辺が3.5～3.6mを測る正方形に近いプランを呈し、底面には、長方形土坑と溝状の掘り込みを伴う、竪穴状の土坑で、摺鉢が出土。

(2) 出土遺物（第212～228図）

L区で出土した大半の遺物は、SM 3～4間に検出された。出土品は、碗、皿、瓶、猪口、鉢、徳利、燈明皿、摺鉢、炮焙、土鍋、香炉、硯、砥石、石臼、石鉢、石塔片等で、金属製品は、僅かに煙管雁口片一点であった。紙面上253点を掲載した。

陶磁器の生産地は、肥前系、瀬戸美濃系の所産が大部分を占め、他に京焼系、龍泉系舶載品、産地不明の製品が見られる。

肥前系の製品は、くらわんか手と称される雪輪に梅花文を描くもの（8～15）、見込み中央に五弁蓮花（五弁花と呼ぶ小花文）を染付したもの（7、25、26、30）、コンニャク印判による装飾を施すもの（18～22）が中心で、18世紀代に肥前磁器が国内市場に向けて安価な商品を焼造したものが中心である。他に唐津焼系の碗と皿、色絵碗（34）、青磁片（40、41）、北九州系の製品と考えられるもの（42）も見られるが、大半のものが18世紀代に位置付けされよう。

瀬戸美濃の製品は、16世紀～19世紀初頭頃のもので、大窯～連房式登り窯によって焼成されている。その主体は、連房式登り窯のもので17世紀後半～18世紀間に位置付けされる。17世紀後半～18世紀前葉に比定されるものは、御深井釉スリ絵、鉄釉丸碗等が見られ、18世紀中葉～後葉のものは、塗り分け碗、徳利、燈明皿等である。

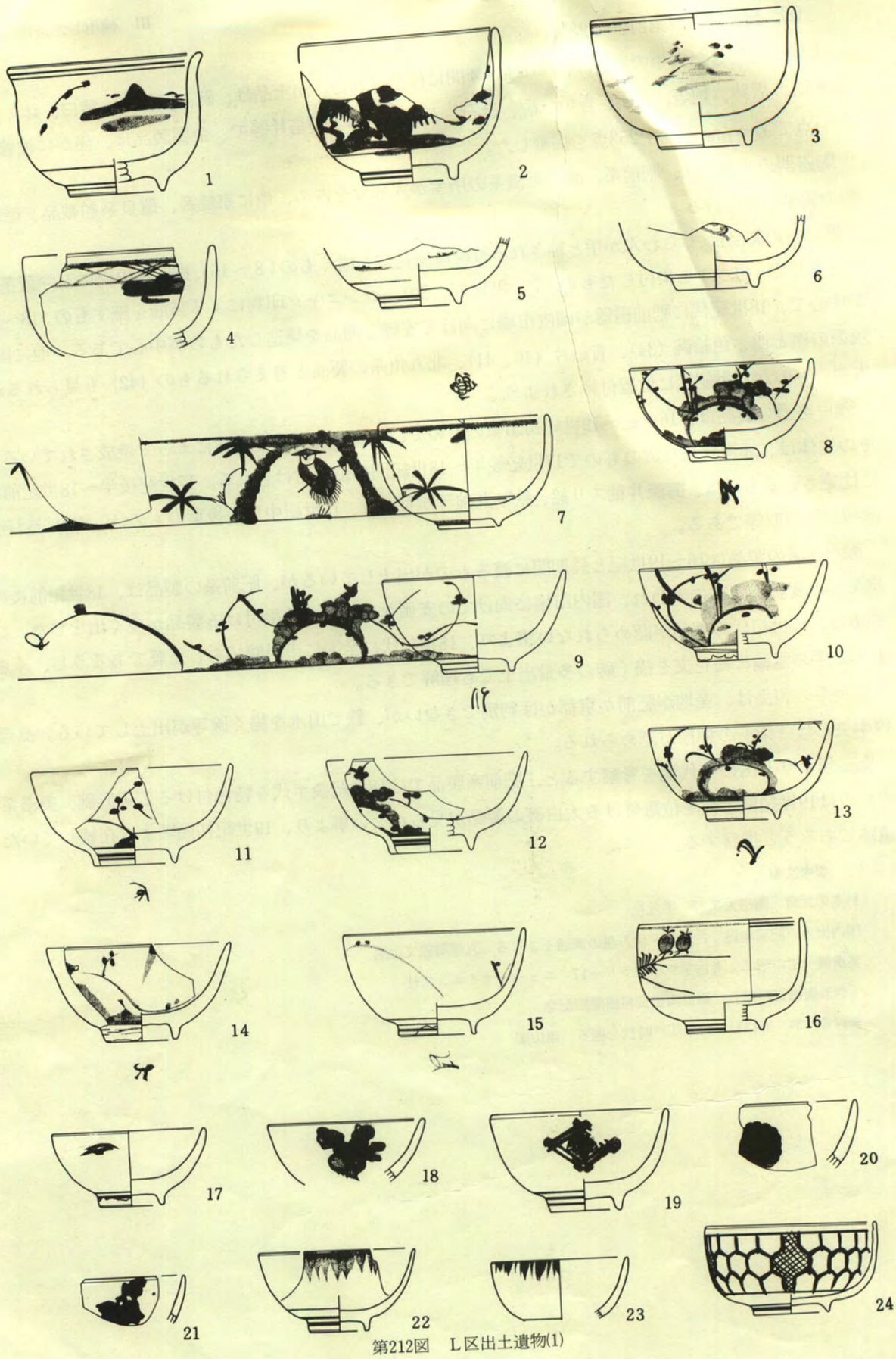
瀬戸美濃の製品は16～19世紀と長期間に渡るものが出土しているが、肥前系の製品は、18世紀前後の窯業界の変貌が如実に表われ、国内市場に向けての安価な18世紀を特徴付ける製品が多く出土した。この事は、17世紀代の製品が認められない事より、18世紀代に全国に市場開拓をした証であろうし、くらわんか手の雪輪に梅花文を描く碗の多量出土でも理解できる。

京焼系の製品は、産地が肥前か京都かは判別できないが、鉄で山水を描く碗等が出土している。高台内中央には「柴」の押捺が認められる。

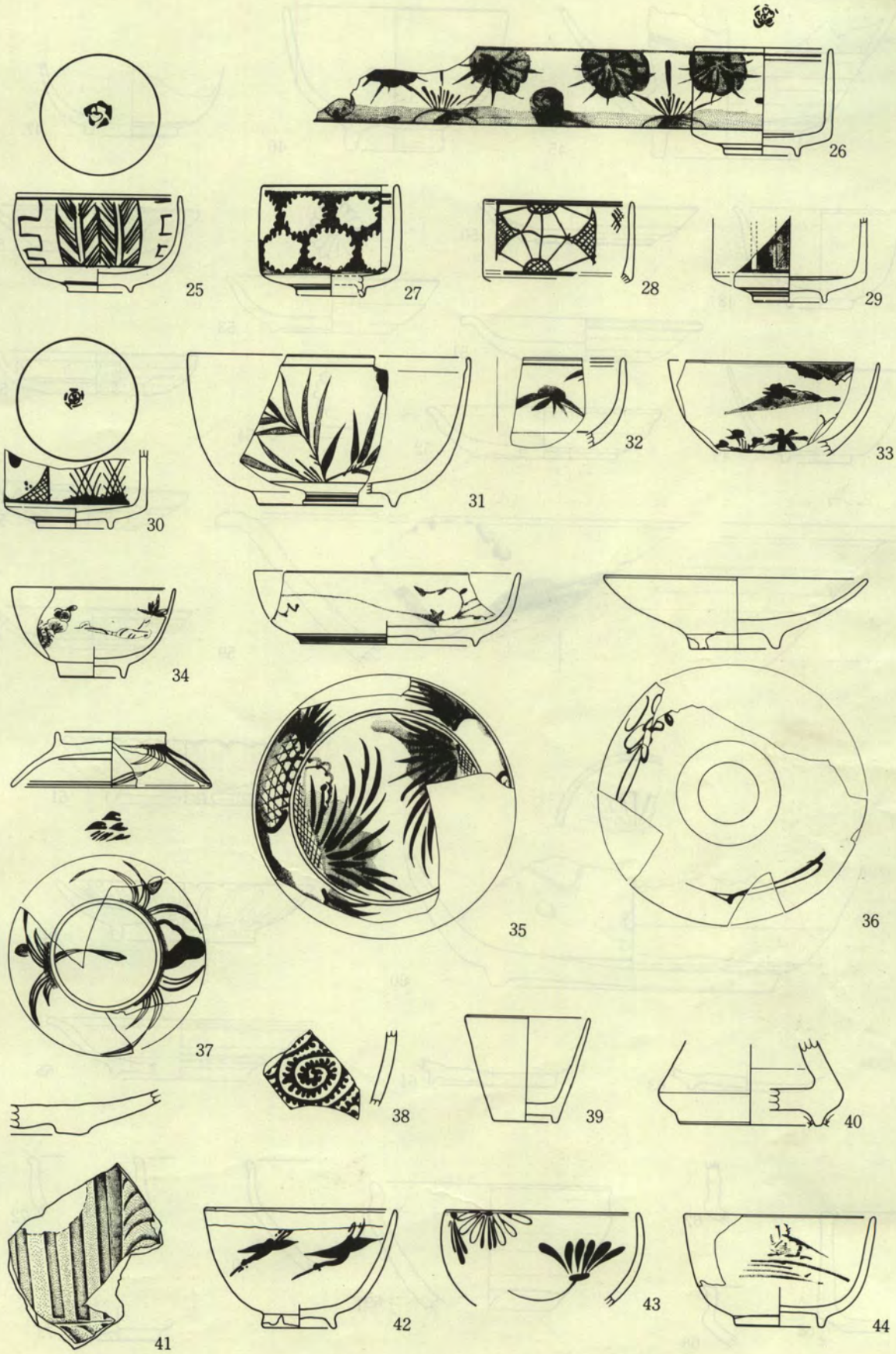
陶磁器よりL区の年代観を考察すると、肥前系製品では18世紀後半代を特色付ける広東形碗、美濃系のものは19世紀前半代を位置付ける太白碗の製品が見られない事より、19世紀初頭頃まで在続していた遺跡であろうと推察する。

参考文献

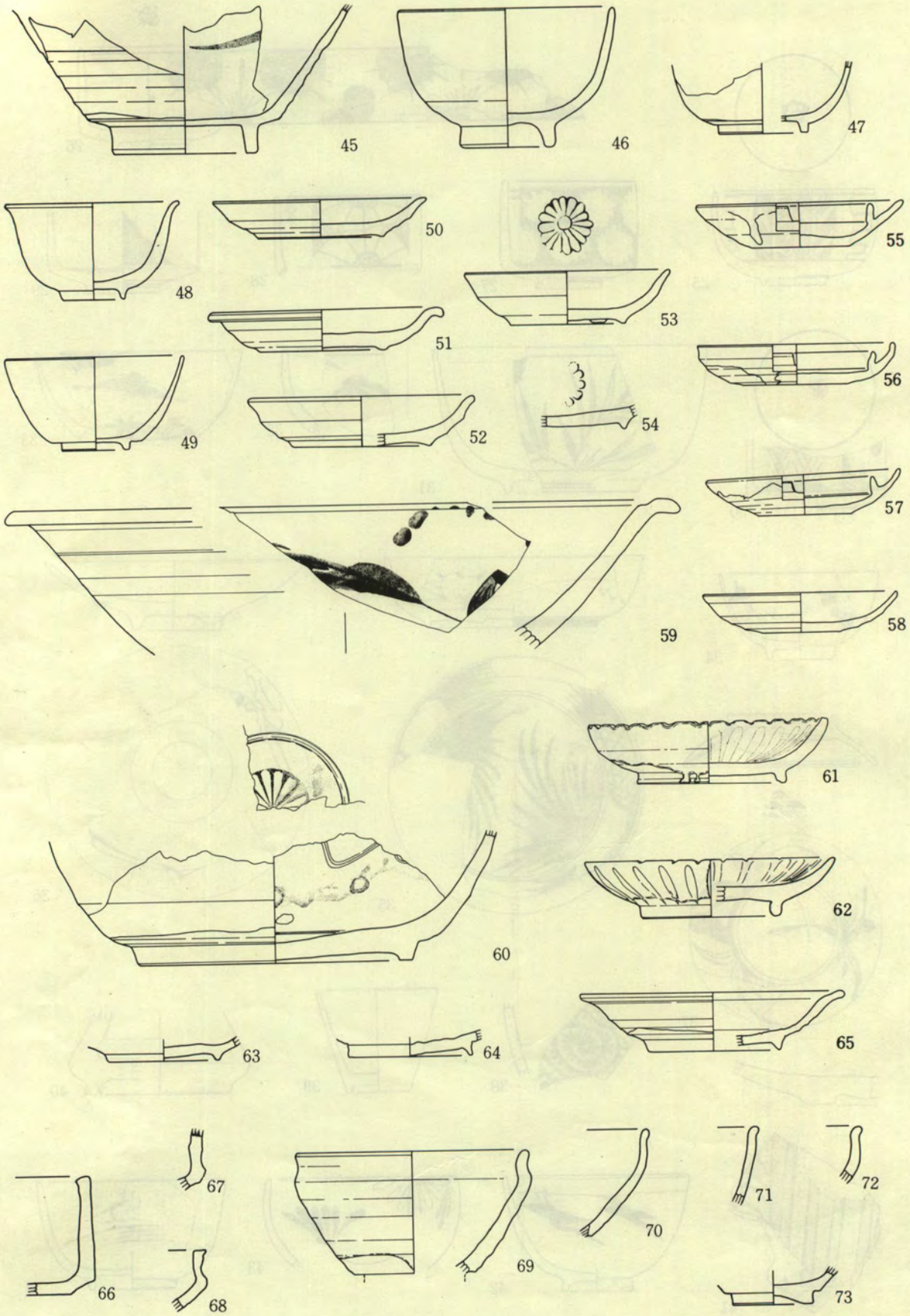
日本の民窯　陶磁大系27　平凡社
国内出土の肥前陶磁　古唐津・伊万里の流通をさぐる　九州陶磁文化館
美濃焼　田口昭二　考古学ライブラリー17　ニュー・サイエンス社
「瑞浪陶磁資料館」　瑞浪陶磁資料館開館記念
季刊考古学　第13号　特集江戸時代を掘る　雄山閣



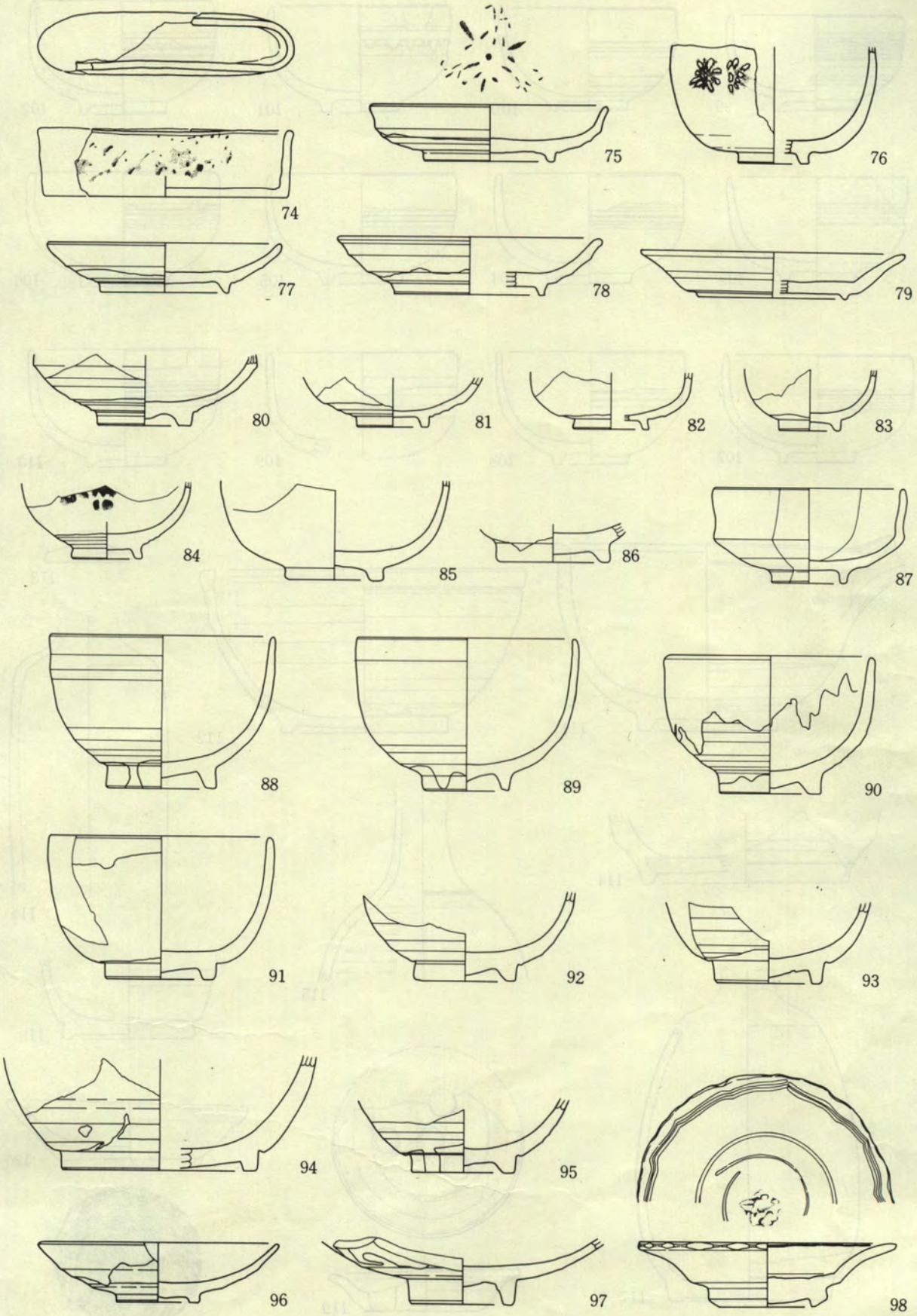
第212図　L区出土遺物(1)



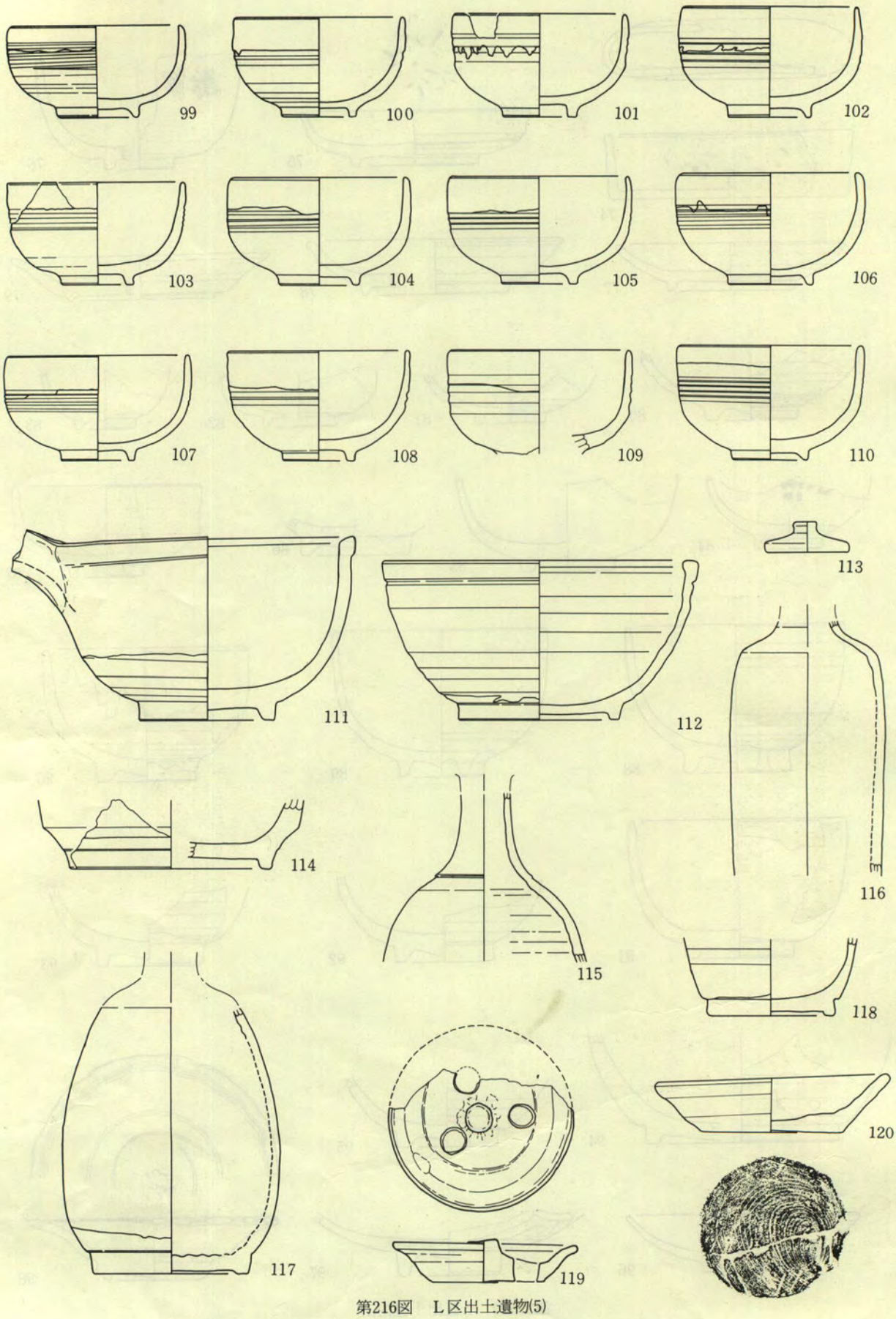
第213図　L区出土遺物(2)



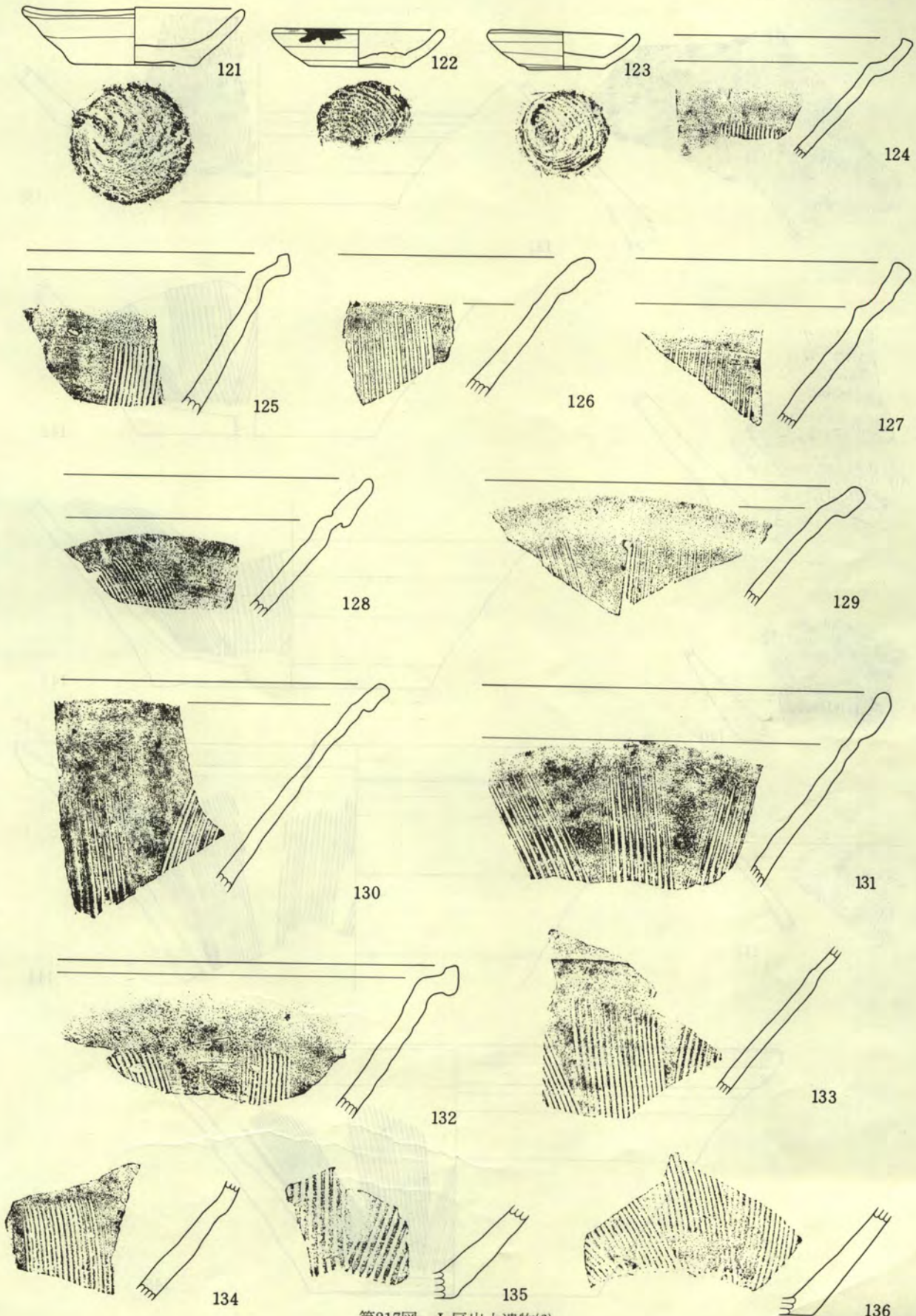
第214図　L区出土遺物(3)



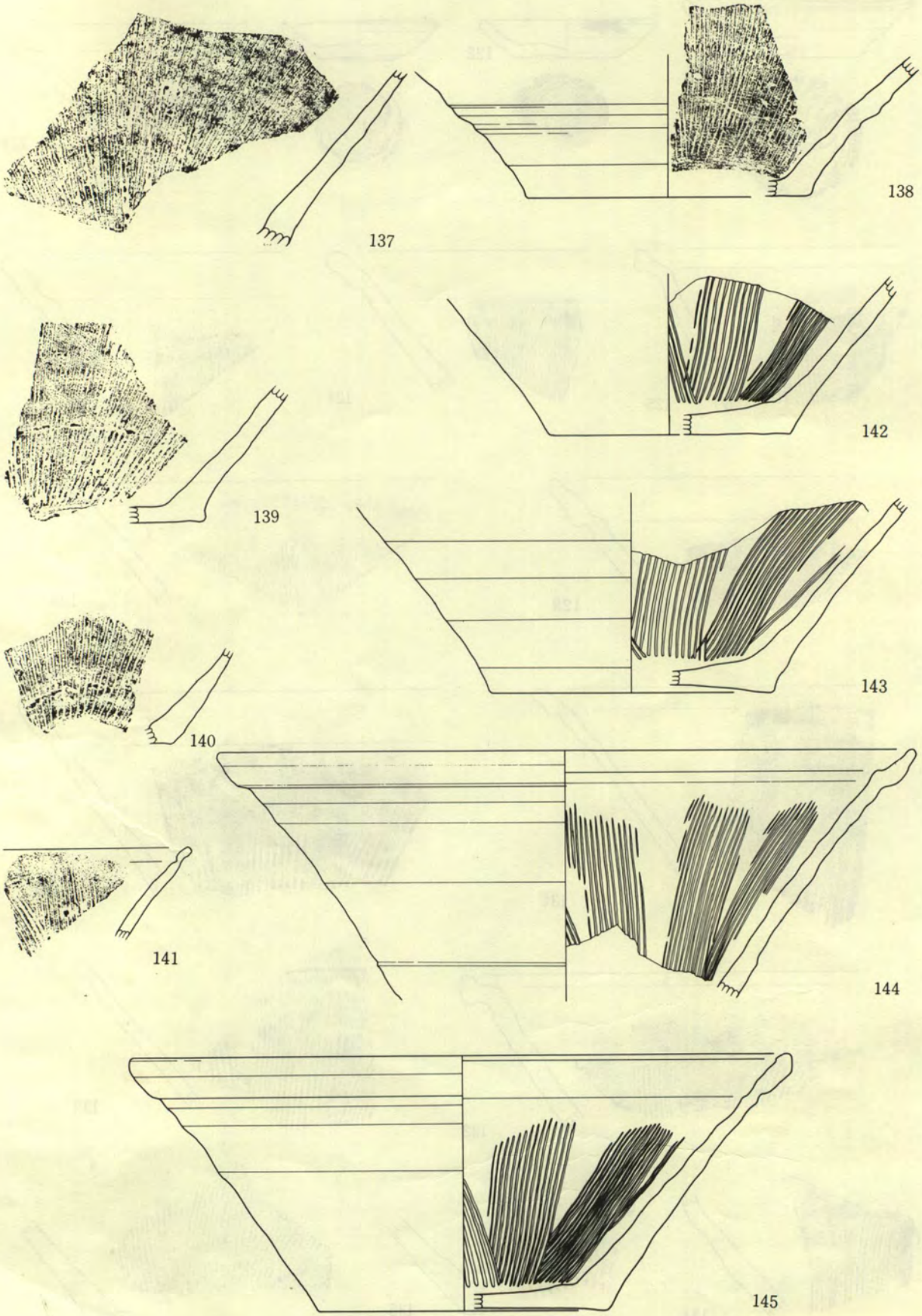
第215図　L区出土遺物(4)



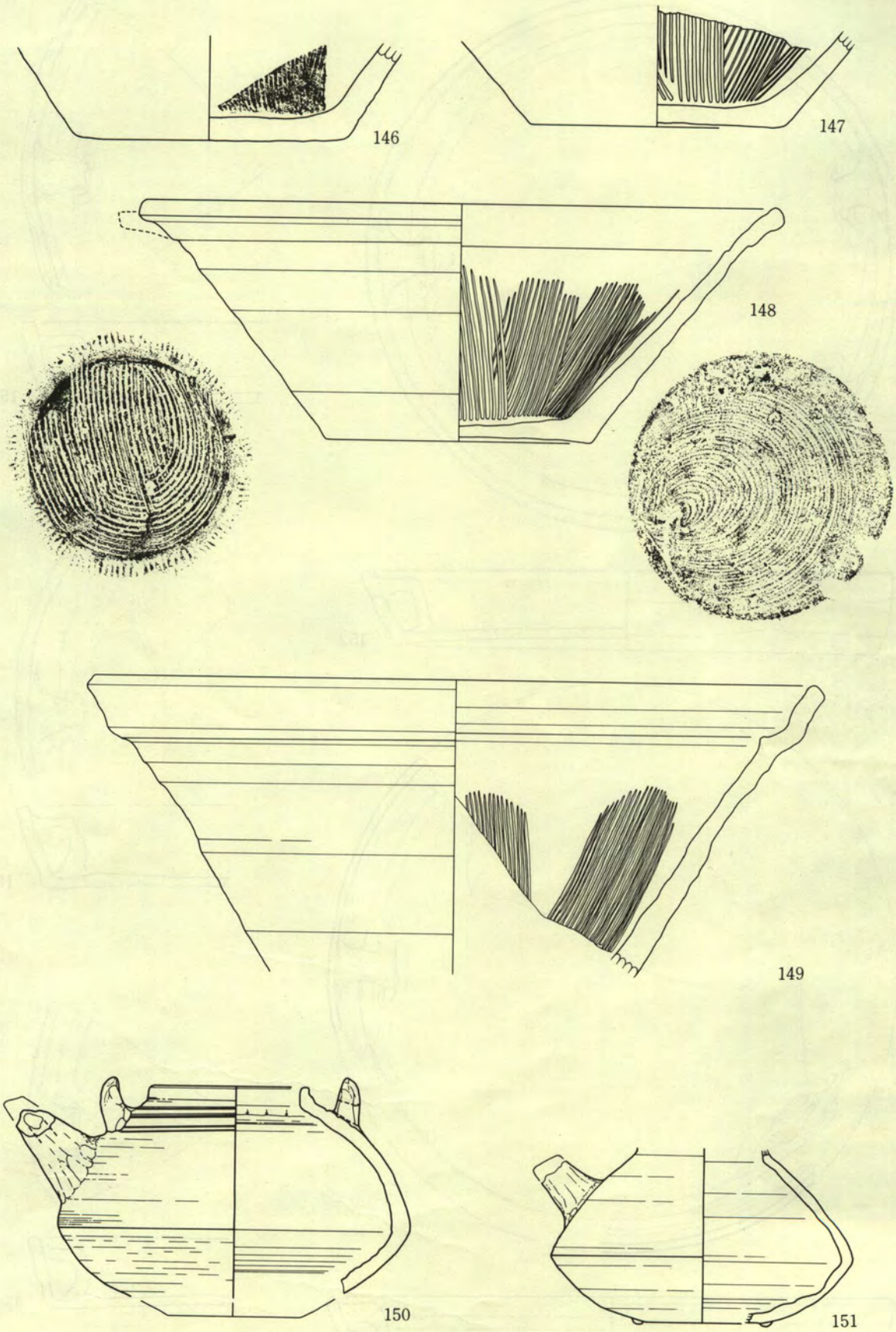
第216図　L区出土遺物(5)



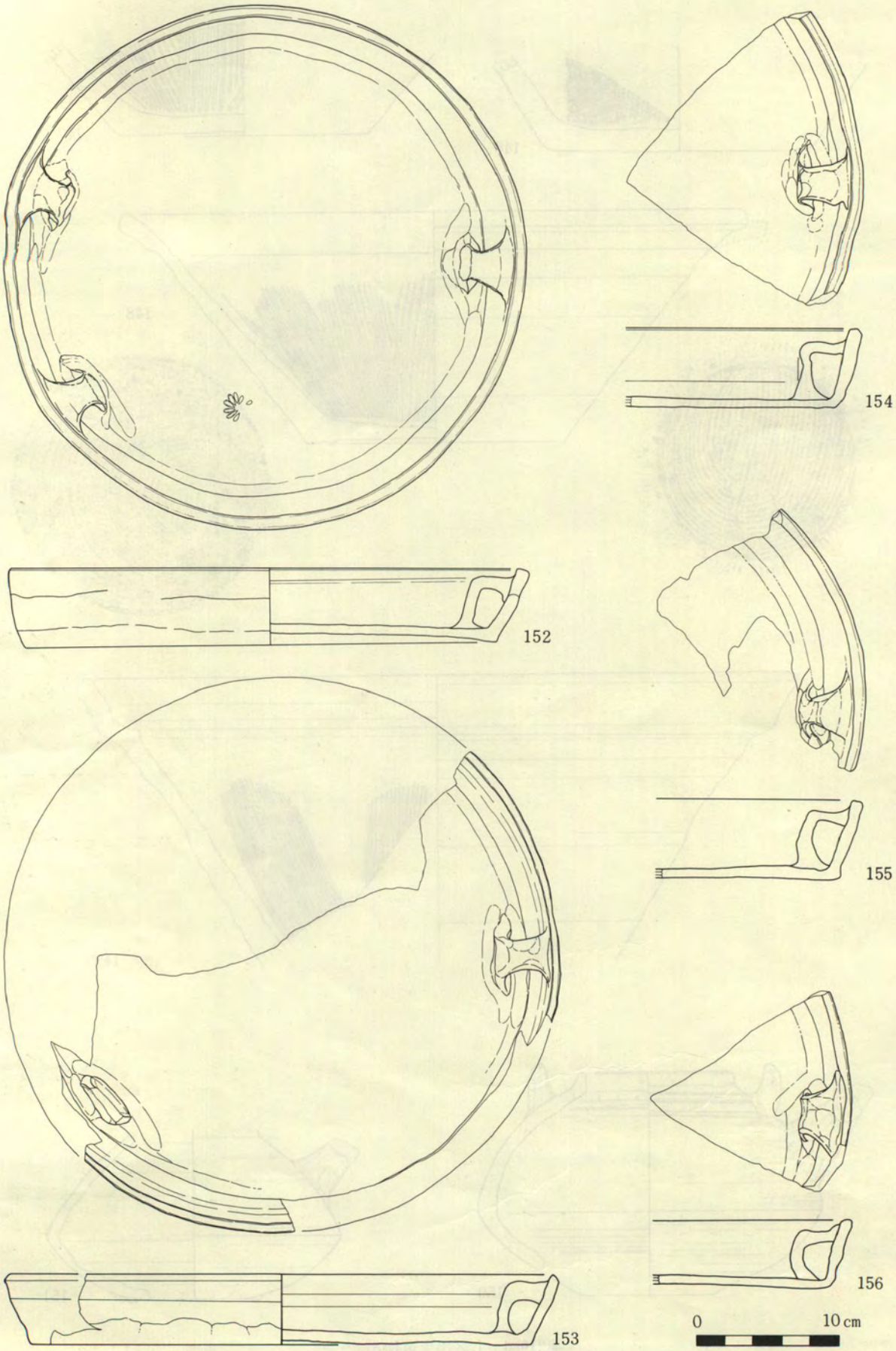
第217図　L区出土遺物(6)



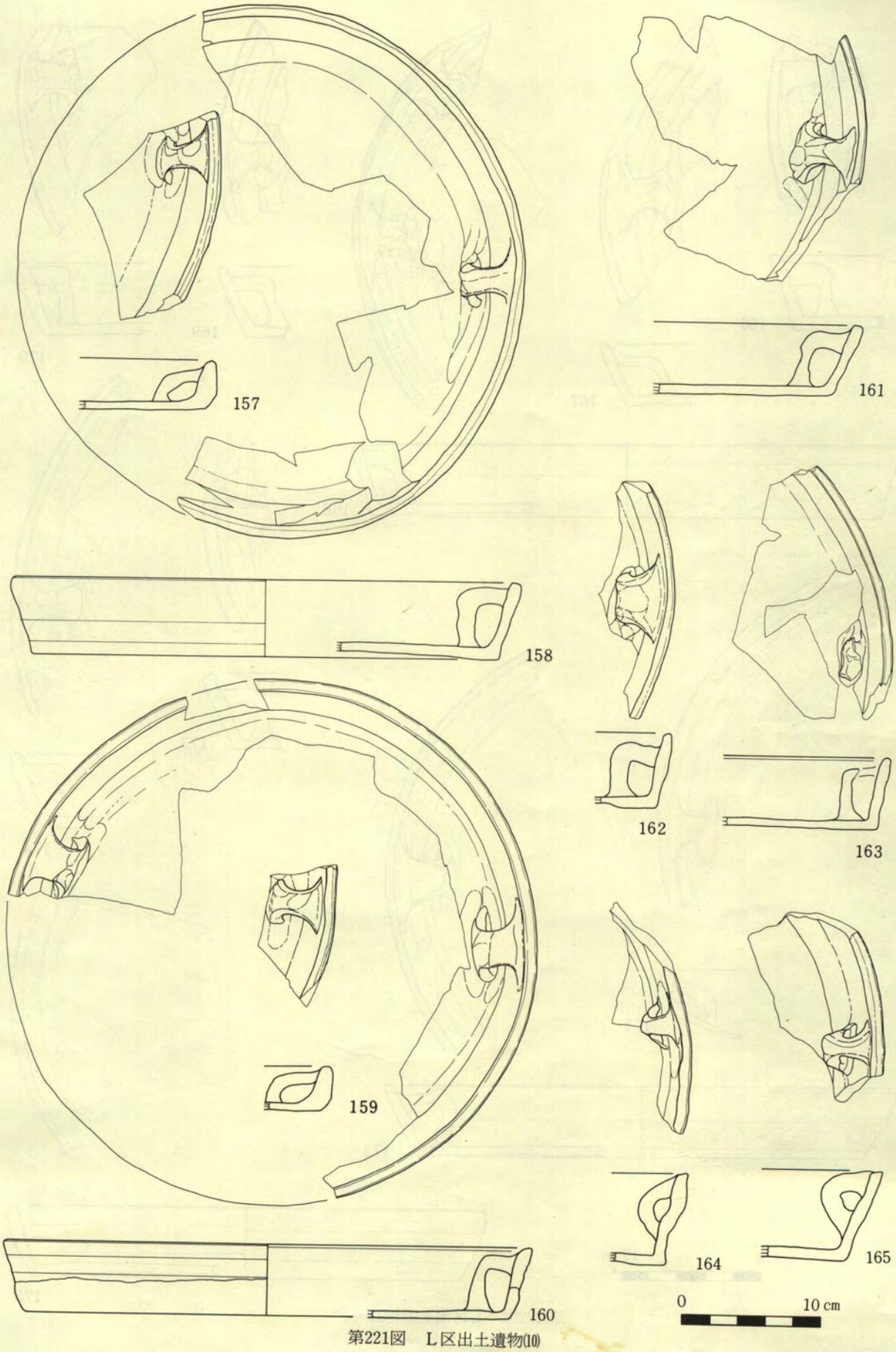
第218図　L区出土遺物(7)



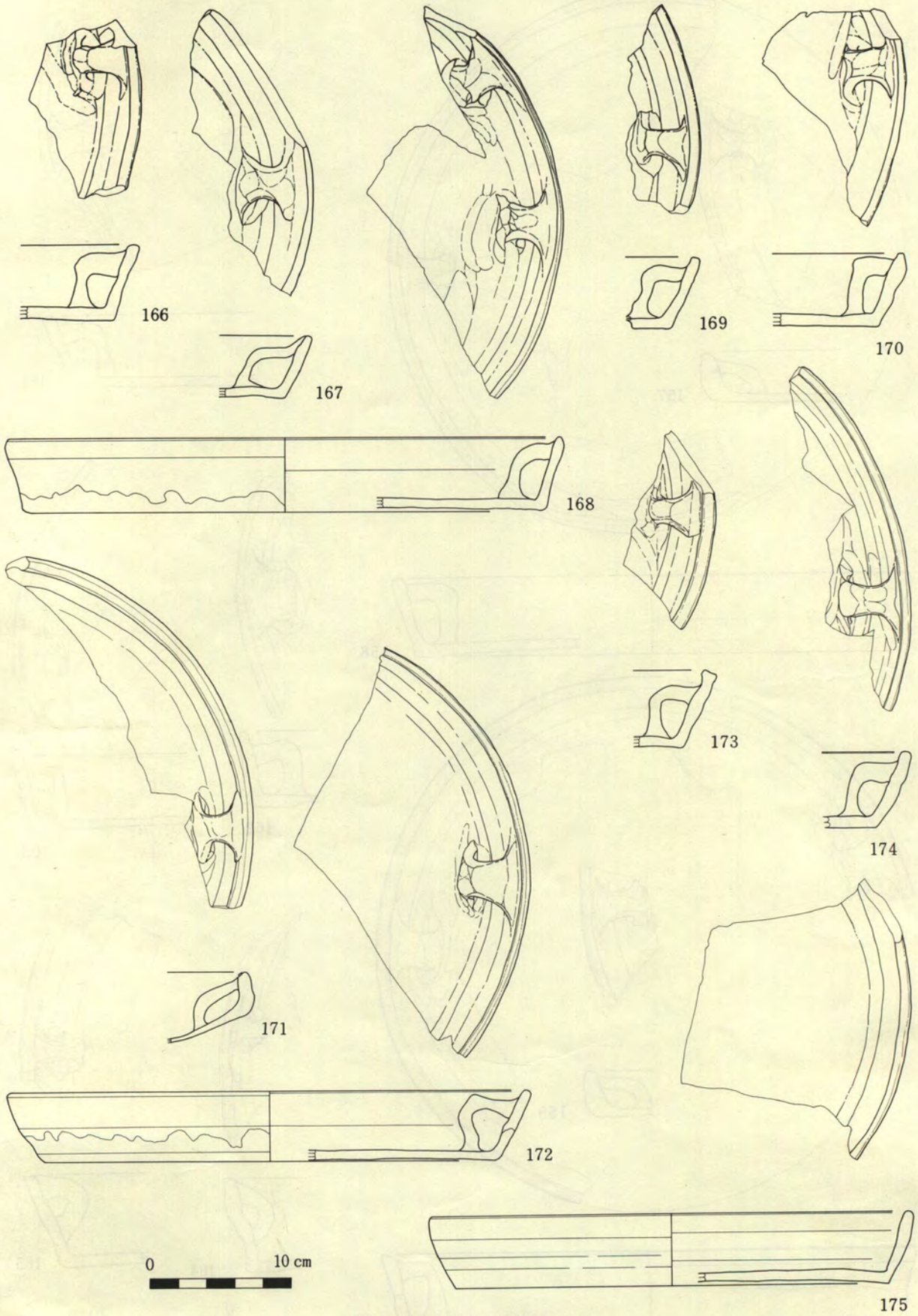
第219図　L区出土遺物(8)



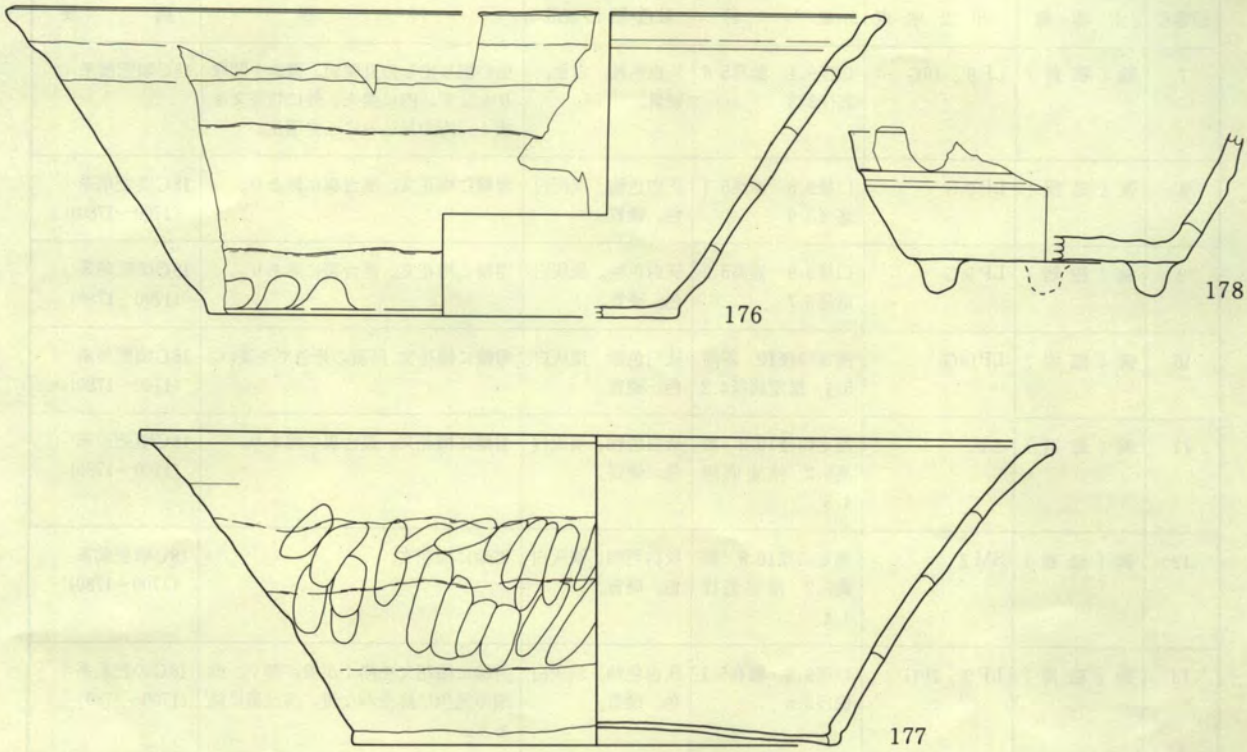
第220図　L区出土遺物(9)



第221図　L区出土遺物(10)



第222図　L区出土遺物(11)



第223図　L区出土遺物(12)

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
1	碗（磁器）	LP9G	推定口径10.2　器高5.1　推定底径5.3	青灰色釉で、内外面に鉄分発色。灰色の細かい粒子。硬質。	外面口縁部に二本。腰部に一本の圏線を廻らせ、この間に山水等を描く。高台外面にも二本圏線廻る。口縁部が外反する。	18C初頃の唐津焼系
2	碗（磁器）	LP8・10G	推定口径10.6　器高7.7　底径5	淡青灰色釉で、外面高台部付近に鉄分発色。胎土、焼成1に似る。	圏線は1と同一。山水を描く。	18C初頃の唐津焼系
3	碗（磁器）	LP9G	推定口径10.9　器高68　底径5	くすんだ青灰色釉で、内外面に鉄分発色。灰色。硬質。	呉須の発色悪く、外面口縁部に二本の圏線と山水の描きが認められる。	18C初頃の唐津焼系
4	碗（磁器）	SE	推定口径10.1	濃青灰色釉。灰色の細かい粒子。硬質。	外面に斜格子？等を描く。	18C初の唐津焼系
5	碗（磁器）	LP9G	底径4.3	青灰色釉。灰色の細かい粒子。硬質。	腰部に一本、高台外面に二本の圏線と山水を描く。	18C頃肥前系
6	碗（磁器）	SM1	底径4.3	淡青灰色釉。灰色の細かい粒子。硬質。	呉須の発色淡い。	18C頃肥前系

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
7	碗（磁器）	LP9、10G	口径9.1 器高5.8 底径3.3	灰白色釉。白色。硬質。	低い削り出しの丸腰碗。雪輪を間取りとして、内に農夫、外に竹笹文を描く。内面見込みに五弁蓮花。	18C頃肥前系
8	碗（磁器）	LP9G	口径9.8 器高5.1 底径3.9	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文。高台裏に銘あり。	18C頃肥前系 (1700～1780)
9	碗（磁器）	LP9G	口径9.9 器高5.2 底径3.7	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文。高台裏に銘あり。	18C頃肥前系 (1700～1780)
10	碗（磁器）	LP10G	推定口径10 器高5.1 推定底径4.2	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文。呉須の発色やや淡い。	18C頃肥前系 (1700～1780)
11	碗（磁器）	L区	推定口径10.2 器高5.2 推定底径4.3	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文。高台裏に銘あり。	18C頃肥前系 (1700～1780)
12	碗（磁器）	SM2	推定口径10.8 器高5.2 推定底径4.4	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文。	18C頃肥前系 (1700～1780)
13	碗（磁器）	LP9、10G	口径9.8 器高5.1 底径3.8	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文を描くが線が細く、呉須の発色は鮮やかな青。高台裏に銘あり。	18Cの肥前系 (1700～1780)
14	碗（磁器）	LP10G	口径9.8 器高5.2 底径3.7	くすんだ灰白色釉淡灰白色。硬質。	雪輪に梅花文。高台裏に銘あり。	18Cの肥前系 (1700～1780)
15	碗（磁器）	LP9G	推定口径9.8 器高5.7 底径4.1	淡灰白色釉。淡灰白色。硬質。	呉須の発色淡い。雪輪に梅花文。高台裏に銘あり。	18Cの肥前系 (1700～1780)
16	碗（磁器）	LP9G	推定口径8.7 器高6 推定底径4.1	灰白色釉。灰白色。硬質。	外面口唇部下と腰部に一本づつの圏線を廻らせ、その間に榴を描く。外面高台部に二本。脇一本、内面口唇部下と立ち上がり部に二本の圏線を廻らせる。	18Cの肥前系
17	小碗（磁器）	LP9G	推定口径8.1 器高3.3 底径2.6	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	高台外と脇に一本づつの圏線を廻らせ、体部に飛鳥を描いているのか？	18頃肥前系
18	小碗（磁器）	LP9G	推定口径8.4	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	外面にコンニャク判による蕪を施す。	18C肥前系
19	碗（磁器）	LP9G	推定口径9.4 器高5.4 底径3.8	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	高台外に二本、脇に一本の圏線を廻らせ、体部外面にコンニャク判による井桁桐文を施す。	18C頃肥前系
20	碗（磁器）	L区			灰白色釉。淡灰白色。硬質。外面にコンニャク判による菊花を施す。	18C頃肥前系
21	小碗（磁器）片	LP10G		濃灰白色釉。灰白色。硬質。	外面にコンニャク判により模様を施すが不明。	18C頃肥前系
22	碗（磁器）	L区	推定口径8.3 器高4.3 底径3.1	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	高台外に二本、腰部に一本の圏線を廻らせ、口唇部から雨降り柳を描く。	18C頃肥前系
23	碗（磁器）片	L区	推定口径7.3	灰白色釉。淡灰白色。硬質。	呉須の発色は淡い。腰部に一本の圏線が廻り、口唇部より雨降り柳を描く。	18C頃肥前系

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
24	碗（磁器）蓋物	LP8・9G	口径9.2　器高4.9　底径4	光沢のある淡灰白釉。白色。硬質。	外面口縁部と腰部に一本づつの圏線を廻らし、その間に亀甲文と格子文を組み合わせる。高台外にも二本の圏線廻る。内面の口縁部が4㎜ほど無釉で、蓋の合わせ部とする。	肥前系？
25	碗（磁器）	LP9G	口径8.5　器高5　底径3.3	淡灰白釉。白色。硬質。	外面口唇部下と腰部に一本づつの圏線を廻らし、その間に矢筈文と折線文を組み合せて描く。高台脇に一本、内面の口唇下に二本。立ち上がり部に一本の圏線が廻る。見込みに五弁蓮花を描く。	肥前系
26	碗（磁器）筒形	LP8G	口径7.2　器高5.5　底径3.9	灰白色釉。白色。硬質。	外面口縁と腰部に一本づつの圏線を廻らせ、その間の口縁部圏線に連木竹、腰部の圏線に輪重ねと草文を交互に描く。高台外と脇に一本づつ、内面口縁部と立ち上がり部に二本づつの圏線を廻らせ、見込みに五弁蓮花を描く。	18C頃肥前系
27	碗（磁器）筒形	LQ8.9.10G	推定口径6.9　器高5.6　推定底径3.3	灰白色釉。灰白色。	高台外に二本、脇に一本、内面口縁部に二本、立ち上がり部に一本の圏線を廻らせる。外面体部に雪輪文を描く。	18C頃肥前系
28	碗（磁器）筒形	LQ9G	推定口径7.6	淡灰白色釉。白色。	外面口唇部下と腰部に圏線を廻らせ、その間に菊割花つなぎを描く。内面口縁部に二本、立ち上がり部に一本の圏線廻る。	18C頃肥前系
29	碗（磁器）筒形	SE	推定口径3.7	淡青味がかった灰白色釉。白色。硬質。	高台外に二本、脇に一本、腰部に一本、内面立ち上がり部に一本の圏線を廻らせる。体部外面の模様は不明。見込み部は五弁蓮花か？	18C頃肥前系
30	碗（磁器）筒形	LP10G	底径3.8	灰白色釉。白色。硬質。	高台外に一本、脇に一本、腰部に一本、内面立ち上がり部に一本の圏線を廻らせ、体部外面に交叉草文、霧、網目文等を描く。見込み部に五弁蓮花の簡略した模様を描く。	18C頃肥前系
31	碗（磁器）蓋物	LP11G	推定口径14.3　器高7.7　推定底径6.9	淡灰白色釉。白色。硬質。	高台外に二本。腰部と口縁部に一本づつの圏線を廻らせ、その間に竹笹文等を描く。	18C頃肥前系？
32	碗（磁器）片	LP10G		淡灰白色釉。白色。硬質。	口縁部下と腰部に一本づつの圏線を廻らし、その間に笹葉散らしを描く。内面口唇部下に二本、立ち上がり部に一本の圏線が廻る。	18C頃肥前系
33	碗（磁器）	LP9G	推定口径10.9	淡灰白色釉。白色。硬質。	外面体部に山水を描く。	18C頃肥前系？
34	碗（磁器）色絵碗	LP10G	推定口径8.4　器高4.6　底径3.3	淡白色釉。白色。硬質。	体部外面に花文等を赤、青、黒、淡青色釉で描く。見込み部にも花文らしき模様が見られるが、剝がれが酷く不明。軽く、薄手のつくり。	18C頃肥前系

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
35	皿（磁器）	LP8、9G	口径13.6 器高3.7 底径8.9	淡灰白色釉。白色。硬質。	蛇ノ目凹形高台で外面体部に唐草内面に草花文を描く。高台外に二本、脇に一本の圏線を廻らす。	18C後半頃肥前系
36	皿（磁器）	LP9G	推定口径13.6 器高3.7 底径4.6	淡青味がかった灰白色釉。硬質。	見込み蛇ノ目釉ハギで高台は無釉。内面に梅の折枝文を粗放に描く。	17C後半～18C前半頃肥前系
37	蓋（磁器）	L区	口径10.2 つまみ径5.2 底径2.8	淡青味がかった灰白色釉。灰白色。硬質。	外面に草花文をあしらい、内面口縁部に二本、天井部に一本の圏線を廻らし、中央部に鳥と雲を描く。	18C後半頃肥前系か？
38	瓶（磁器）	SD		灰白色釉。灰白色。硬質。	外面に蕨手唐草を描く。	18C頃肥前系
39	猪口（磁器）	SD SE	推定口径6.3 器高5.4 底径3.2	灰白色釉。灰白色。硬質。	無文の猪口である。	
40	瓶（磁器）片 青磁	LQ9G	底径7.3	光沢のある鮮やかな青緑色釉。灰白色。硬質。	花生の底径片であろう。	17C後半頃の頃肥前系か？
41	皿（磁器）片 青磁	LP8G		光沢のある淡青緑色釉。灰白色。硬質。	畳付部は無釉。	
42	碗（陶器）	LP9G	口径9.7 器高6.2 底径3.6	褐色釉。ざっくりした吸水性のある黄白色。軟質。	体部外面の褐色釉上に鶴を三羽鉄絵し、内外面口縁部に青色釉を漬け掛けする。軽量感のある碗である。	九州系の焼物であろう。
43	碗	LP9G	推定口径9.9	淡緑灰色釉。黄白色の細かい粒子。硬質。	貫入の入る淡緑灰色釉に、緑白色で半菊などの花柄を描く。	18C後半頃の京焼風 瀬戸美濃
44	碗	LP9・10G	推定口径9.8 器高5.8 底径4.5	透明感のある淡黄色釉。細かい黄白色。硬質。	無釉高台で、外面体部に山水を鉄絵する。高台裏に◎の円刻と柴であろう押印がある。	17C後半頃の京焼風
45	鉢	LP10G	推定底径	光沢があり透明な淡灰色釉。細かい粒子の灰白色。硬質。	高く直立した削り出し高台で無釉である。44と同様 高台裏に柴の押印がある。内面体部に、僅かに絵付けが見られる。	17C後半頃の京焼風
46	碗	LP10G	推定口径11.3 器高7.3 底径4.6	光沢があり細かく貫入の入る灰黄白色釉。黄白色。硬質。	畳付部が無釉。	18C頃の唐津焼系
47	碗	SD	推定口径4.7	光沢がある淡黄色釉。細かい粒子の黄白色。	シャープに削り出した高台で、外面体部に僅かに鉄画が残る。44に似る。	17C後半頃の京焼風
48	碗	L区	推定口径9.1 器高3.3	光沢のない貫入の入るにぶい黄白色釉。細かい粒子の黄白色。硬質。	縁反形の碗で、軽量感がある。	19C京焼風
49	碗	LP	推定口径9.3 器高4.9 底径3.5	淡黄白色釉。黄白色。硬質。	シャープな削り出し高台で、無釉。	18C前半の京焼風

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
50	皿（陶器）	L区	口径11.2　器高2 底径6.6	長石釉。ざっくりした白色。硬質。	僅かに削り出す低い高台で、内面に三ケ所の目あとが残る。	17C後半頃の美濃焼か？
51	皿（陶器）	L区	推定口径11.9　器高2.2　底径6.6	長石釉。灰色。硬質。	灯明皿に使用したのか、僅かに口唇部に油カスが付着。高台裏に円錘ピン痕。折縁皿。	17C中葉の美濃焼か？
52	皿（陶器）	L区	推定口径11.7　器高2.6　推定底径8.8	長石釉。赤褐色土と灰白色の混合土？。硬質。	内外面が淡赤色と白色が班となる。	17C前半頃の美濃焼か。
53	皿（陶器）	L区	推定口径10.7　器高2.8　底径6.1	灰釉。ざっくりした灰白色。硬質。	丸皿で内面底部に16弁の菊花を押印する。外面底に輪トチンが溶着。	17C前半の美濃焼
54	皿（陶器）片	SM		灰釉。灰白色。硬質。	内面底に12弁？の菊花を押印。外面底に輪トチン痕。	16C頃の美濃焼
55	灯明皿（受け付）	LP10G	口径10.8　器高2.8　底径5.1	鉄釉。暗灰白色。硬質。	光沢のない褐色の鉄釉で、受け付皿部の切り込みは凹字形。	18C後半頃の美濃焼
56	灯明皿（受け付）	LP9G	口径10.2　器高2.1 底径5.4	鉄釉。暗灰白色。硬質。	褐色の鉄釉で、外面底部は、釉を拭きとる。受け付皿部の切り込みはV字形。	18C後半頃の美濃焼
57	灯明皿（受け付）	LP8G	口径10.1　器高2.1 底径4.8	鉄釉。暗灰白色。硬質。	55の器形に似るタイプである。	18C後半頃の美濃焼
58	灯明皿	L区	推定口径102　器高2.1　底径4.2	鉄釉。黄白色。硬質。	光沢のない褐色の鉄釉で、外面底部周辺は拭きとり。内面底部にリング状重ね痕残る。	18C後半頃の美濃焼
59	大平鉢	LP9G	推定口径34.8	黄瀬戸釉。黄白色。硬質。	所謂笠原鉢とされるもので、内面体部に草花文を鉄絵し、口縁部から縁帯部にかけて、銅緑釉（タンパン）を施す。	17C中頃の美濃焼
60	大平鉢	LQ7G	推定口径14.4	黄瀬戸釉。ざっくりした淡黄白色。	内面底部中央に16弁菊花と櫛目による同心円文、立ち上がり部から体部に櫛目状文と灰釉織部を施す。	17C美濃焼
61	皿（菊皿）	SE	口径12.6　器高3.3 底径7.8	灰釉。灰白色。硬質。	打型により菊花文を形取する。口唇部に花弁状にヘラで切り込み、高台を付す。内面には三ケ所の目あとが残る。	18C美濃焼
62	皿（菊皿）片	LP8G	推定口径13　器高3　推定底径7.2	長石釉。灰白色。硬質。	打型によって内面の菊花文を形取する。釉下の素地に布目痕が残る。口唇部にヘラで切り込み、外面体部にもノミで花弁を作り出す。高台は付高台である。	17C頃の美濃焼
63	皿	SM1	推定底径5.8	鉄釉。ざっくりした淡黄白色。硬質。	内面底部を円形に釉を拭きとる「内はげ」の技法で高台裏に輪トチン痕が残る。	16C美濃焼
64	皿	LQ8G	底径6.4	鉄釉。淡灰白色。硬質。	断面三角気味の高台で、内面底部に凸帯を輪状に作り出す。「輪はげ」皿である。	17C中頃の美濃焼

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
65	皿	LQ8 LP10	推定口径13.8 器高3.1 推定底径6.9	鉄釉。淡灰白色。硬質。	64と同一器形のもので、輪はげ折縁皿である。	17C中頃の美濃焼
66	香炉片	LQ8 G		鉄釉。淡黄白色。硬質。	円筒形を呈し、口縁部は内傾。底部より腰部を斜めに整形する。	18C頃の美濃焼
67	香炉片	L区		鉄釉。淡黄白色。硬質。	袴腰形香炉片。	18C頃美濃焼
68	香炉片	LQ8 G		灰釉。淡黄白色。硬質。	袴腰形香炉片。	美濃焼
69	天目茶碗	SM2	推定口径12.1	鉄釉。淡黄白色。硬質。	高台部を欠く。露胎部に化粧がけはなく、器肉は厚い。	16C後半頃の美濃焼？
70	天目茶碗	L区		鉄釉。淡黄白色。硬質。	全体に薄い器肉で、露胎部に化粧がけはない。くびれは弱い。	16C中葉以降の美濃焼
71	天目茶碗	L区		鉄釉。灰白色。硬質。	口縁部が垂直気味に立ち上がり、口縁端を小さな玉縁状に仕上げる。	美濃焼
72	天目茶碗	L区		鉄釉。灰白色。硬質。	弱いくびれから、口縁端を小さな玉縁状に。	美濃焼
73	天目茶碗	SM1	底径4.2	鉄釉。淡黄白色。硬質。	削り出しの高台で、底裏は内反りで、高台脇を水平に削り、腰部より八の字状に開く。	美濃焼
74	贄盥	LP8・9G	推定口径幅最大13.1 器高3.5 底径12.8	御深井釉。灰白色。硬質。	タタラを楕円の環にして、底部の一文字タタラに付ける。摺絵は乱れ、模様は不明。	18C美濃焼
75	皿	LP9・10G	口径12.3 器高3 底径6.8	御深井釉。灰色。硬質。	削り出し高台で、外面腰部をヘラ調整。内面底部に摺絵で花文を施す。三ケ所の目あとが残る。	18C美濃焼
76	碗	LP10G	推定口径10.6 推定器高6.2 底径3.2	御深井釉。灰白色。硬質。	口径に比べて、低く小さい高台である。外面体部に摺絵で花文を施す。	19C初の美濃焼
77	皿	LP9G	推定口径12.2 器高2.6 推定底径6.7		内面にリング状重さね痕残る。	18Cの美濃焼
78	皿	LQ8G	推定口径13.7 器高3 推定底径7.9	灰釉。灰白色。硬質。		18C美濃焼
79	皿	SM2	推定口径13.9 器高2.4 推定底径7.8	灰釉。黄白色。硬質。	低く小さい削り出高台である。	18C美濃焼
80	小鉢	LP9・10G	底径4.9	透明な淡緑灰色釉。黄白色。硬質。	高台脇から八の字状に開き、腰高とし、胴部から口縁部へ垂直気味に立ち上がる器形となろう。	18C美濃焼
81	碗	LQ8G	推定底径3.4	透明な淡灰色釉。ざっくりした白色。硬質。	無釉高台。	18C頃の美濃焼

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
82	碗	LP9G	推定底径3.9	透明感のある淡灰白釉。淡黄白色。硬質。	全体に薄手の作りで、無釉高台。	18C美濃焼
83	小碗	LQ8G	底径3.2	透明な淡緑灰白釉。ざっくりした白色。硬質。	無釉高台	18C頃の美濃焼
84	碗	LP9G	底径3.6	透明な淡緑灰白釉。ざっくりした白色。硬質。	体部外面にコバルトにより花文らしき模様を描く。無釉高台。	18C後半頃の美濃焼
85	碗	LP9G	底径4.9	貫入の目立つ灰釉。灰色。硬質。	大ぶりの碗で、無釉高台。	18C美濃焼
86	碗底部片	LP9G	底径5.7	貫入の目立つ灰釉。灰色。硬質。	無釉高台。	18Cの美濃焼
87	小鉢	LP10G	口径10.1　器高5 底径3.9	灰釉と鉄釉。灰色。硬質。	高台脇より八の字に開き腰高とする。口縁部は垂直気味に立つ。釉は灰釉と鉄釉を中央付近で塗り分ける。畳付部は拭きとっている。	18C後半の美濃焼
88	碗	SE	推定口径11.7　器高8　底径5.7	灰釉。灰色。硬質。	無釉高台の大ぶりの碗。	17Cの末頃の美濃焼？
89	碗	LQ8LP9G	口径11.4　器高8 底径4.4	灰釉。灰色。硬質。	88より光沢がある灰釉。	17C末頃の美濃焼？
90	碗	LP10G	推定口径10.1　器高7.2　底径5.3	鉄釉。灰白色。硬質。	高台部は拭きとり。	17～18C初の美濃焼
91	碗	LP9G	推定口径11.5　器高7.5　底径5.7	鉄釉。黄白色。硬質。	無釉高台。	17C末～18C初の美濃焼。
92	碗	SE	底径5.2	鉄釉。灰黄白色。硬質。	無釉高台。	17C末～18Cの美濃焼
93	碗	LP10G	底径5	鉄釉。黄白色。硬質。	91に似る。	17C末～18C初の美濃焼。
94	鉢	LQ8G	推定口径10.2	鉄釉。黄白色。硬質。		18C美濃焼
95	碗	SE	底径5.3	鉄釉。灰黄白色。硬質。	見込みに海鼠釉調の灰釉。	17～18C初の美濃焼
96	皿	LP10G	推定口径12.4　器高3.1　底径4.3	青緑釉。灰色。硬質。	見込み蛇ノ目釉ハギで無釉高台。	17C後～18C前半の唐津焼。
97	皿	SM	底径5.3	青緑釉。灰白色。硬質。	見込み蛇ノ目釉ハギで無釉高台。蛇ノ目釉ハギ部と畳付部に四ケ所の熔着防止の砂目が残る。	17C後～18C前半の唐津焼。
98	皿	L区	口径13.5　器高3.4 底径5.1	淡青緑釉。灰色。硬質。	稜花皿で、内面底部に二条の圏線を廻らせ、中央に印文を施すが明確を欠く。内面口縁部に波状の櫛描きが廻る。	15C～16Cの龍泉窯系。

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
99	碗 塗り分け碗	LP9G	口径9 器高5 底径4.2	灰釉と鉄釉。淡灰白色。硬質。	内面と外面口縁部に灰釉。胴部～腰部、畳付部を除く高台部に鉄釉をかける。外面口縁部から胴部にかけて数条の沈線廻る。	18C中葉～後半の美濃焼
100	碗（同上）	LP9G	推定口径9.1 器高3.9 底径3.9	同上。	同上。	同上。
101	碗（同上）	LP8G	口径9.2 器高5.1 底径3.9	同上。	同上。	同上。
102	碗（同上）	LP9G	口径9.3 器高6 底径4.4	同上。	同上。	同上。
103	碗（同上）	LP9G	推定口径9.4 器高5.5 底径3.8	同上。	同上。	同上。
104	碗（同上）	LQ10G	口径9.4 器高5.8 底径4.1	同上。	同上。	同上。
105	碗（同上）	LP9・10G	口径9.1 器高5.8 底径4	同上。	同上。	同上。
106	碗（同上）	LP9・10G	口径9.6 器高6 底径4.4	同上。	同上。	同上。
107	碗（同上）	LP9G	口径9.8 器高5.1 底径3.9	同上。	同上。	同上。
108	碗（同上）	LP9G	口径9.7 器高4.9 底径3.8	同上。	同上。	同上。
109	碗 塗り分け碗	LP9G	口径9.6	灰釉と鉄釉。淡灰白色。硬質。	内面と外面口縁部に灰釉。胴部～腰部、畳付部を除く高台部に鉄釉をかける。外面口縁部から胴部にかけて数条の沈線廻る。	18C中葉～後半の美濃焼
110	碗（同上）	LP10G	口径9.7 器高6.2	同上。	同上。	同上。
111	片口鉢	LP9・10G	推定口径15.8 器高9.9 底径7.3	灰釉。灰白色。硬質。	片口の先端部を欠く。内面から外面腰部にかけて施釉。高台は削り出し、口唇部は内傾に面取され、口縁部は1cm幅ほど肉厚にした縁が廻る。内面底部に三ケ所の目あと残る。	18C後半？の美濃焼
112	鉢	LP9・10G	推定口径16.6 器高8.6 底径8.7	鉄釉。灰色。硬質。	約半分残存。内面から高台脇付近まで施釉。口縁部は玉縁状に作り出している。	18C後半
113	蓋	SM1	鈕径1.1 高さ1.7 底径4.4	光沢のある淡黄白釉。灰白色。硬質。。	一部の釉は海鼠釉調。裏面は釉を拭きとっている。	美濃焼？
114	不明底部	L区	推定口径10.8	鉄釉。灰色。硬質。		不明？
115	徳利片	LQ8G		鉄釉。灰白色。硬質。	細い頸部から段を呈し、なで肩に広がる胴部へと続く。ラッキョ形徳利？	18C後～19C初美濃焼。
116	徳利	LP9・10		灰釉。灰色。硬質。	寸胴形徳利の肩部から胴部片で通称「高田徳利・貧乏徳利」と言われるものである。	18C後半の美濃焼

図番号	土器種	出土地点	量目	釉色・胎土・焼成	特徴	摘要
117	徳利	LP9・10G	底径8.4	鉄釉。灰白色。硬質。	所謂ラッキョ形徳利で、高台脇付近まで鉄釉を施し、肩部から胴部にかけ灰釉を流しがける。外面高台と内面は釉を拭きとる。	17C後半～18C前半の美濃焼
118	底部片	LQ8G	底径6.7	鉄釉。淡黄白色。硬質。	低い削り出しの高台で、内面は釉を拭きとっている。双耳壺か徳利の底部であろう。	18C後半の美濃焼

瓦器質　かわらけ

図番号	土器種	出土地点	量目	色調・胎土・焼成	特徴等
119	灰落し？	LP9G	鈕径 1.1　口径 9.9 底径 6　器高 2.4	内面は淡褐色。外面くすんだ灰白色。砂粒を含む。硬質。	内面中央部に乳頭状の鈕部を作り、内面底部に1.4cmほどの孔を三ケ所設ける。底部よりハの字状に開き、口縁部を折縁状に作り、縁帯部を内傾させる。
120	かわらけ	SM1	口径11.7　器高 3.1 底径 5.6	褐色。粗砂やや多い。やや硬質。	左回転ロクロによる形成で、回転糸切り未調整である。やや歪む器形で、口唇部がすれている。
121	かわらけ	SM1	口径12.3　器高 3 底径 7.5	淡褐色。砂粒多い。やや軟調。	左回転ロクロによる形成で、回転糸切り未調整である。口唇部に僅かに油カスが付着する。
122	かわらけ	LP9G	口径 8.9　器高 2 底径 4.8	淡橙褐色。粗砂粒多い。硬質。	左回転ロクロによる形成で、回転糸切り未調整である。口唇部に油カスが付着する。内面底部は渦巻状を呈す。
123	かわらけ	SM2	口径 7.9　器高 2 底径 4.1	暗灰褐色。粗砂粒多い。硬質。	右回転ロクロによる形成で、回転糸切り未調整である。外面の口縁部に油カス付着する。

摺　鉢

図番号	出土地点	釉色・胎土・焼成	
124	SE	褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	口縁帯が器肉幅ほどスライドする折縁で、口唇部は意識的に波状に研磨されている。内面体部に残る櫛目は14条を数える。
125	LP10G	同　上	124に以るが、折縁の縁帯を1cm幅ほど設ける。口唇部を上記同様に研磨している。櫛目は10条以上が一単位となろう。
126	LP9G	暗紫灰色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	2.5cm幅の口縁帯で偏平な玉縁状を呈する。内面には軽い陵を設け、陵下まで櫛目が位置する。12条以上が一単位の櫛目であろう。
127	LP9G	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	口唇部が撥状を呈し、内面口唇部下3cmほどに強い陵を設ける。この外面は大きく弧状に凹む。確認できる櫛目は16条である。
128	L区	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	口唇部下2.5cmほどで折縁となり、内面は段を設け、外面では折り返し状の縁帯が廻る。櫛目は孤状に刻され、18条以上が一単位となろう。
129	LP10G	光沢のある褐色～暗褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定口径35cm前後を測る破片である。断面方形状の口縁帯を1.5cm幅で廻らせ、内面に軽い陵を設ける口縁部である。櫛目は一単位が13条を数える。
130	L区	光沢のある褐色～黒褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	129を全体に薄くした形状の破片である。櫛目は一単位が11条以上であろう。
131	LP9G	半光沢の暗褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定口径34cm前後を測る破片である。断面形は126に似て、2.5cm幅ほどの口縁帯が廻り、内面に軽い陵を設けている。内面口縁部に指圧による注口部を設けるが、突出は僅かである。櫛目は一単位が10条を数える。

図番号	出土地点	釉色・胎土・焼成	特　　徴　　点
132	ＬＰ９Ｇ	褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	124・125と同様に口唇部を波状に研磨する破片で、推定口径は36cm前後となろう。断面の形状は125に似る。櫛目は一単位が11条を数える。
133	ＬＱ８Ｇ	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	全体に薄手の作りで、127の形状に似るが、内面に軽い段を設けている。櫛目は一単位が16条である。
134	ＳＭ１	暗紫灰色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	口縁帯の張り出しは弱く、内面の陵も僅かである。櫛目は一単位が19か20条であろう。
135	ＬＰ９Ｇ	半光沢の暗褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	僅かな底部から体部下半の破片である。櫛目は幅広で、一単位が９条以上であろう。条間の凸は摩かれて無地を露出する。
136	ＬＰ８Ｇ	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	僅かな底部から体部下半の破片である。底部は回転糸切り未調整痕が残る。内面は櫛目が充填される。一単位が12条を数える櫛目である。
137	ＬＰ９Ｇ	炉器質で夾雑鉱物粒を多く含む。硬質。	外面体部下半に指頭圧痕、上半は凹凸を呈する。櫛目は一単位が７条で、条は鋭い。
138	ＬＰ９Ｇ	同　上	外面体部に凹凸を残す。底部からの立ち上がり部は摩耗が著しい。内面は櫛目で充填されている。櫛目の一単位は明確を欠く。
139	Ｌ区	硬質で夾雑鉱物粒は少ない。	外面体部は比較的スムーズな器面である。内面は櫛目で充填される。櫛目の一単位は明確を欠く。
140	ＬＰ10Ｇ	同　上	外面体部に細かな凹凸を呈する。一単位が５条の櫛目が充填する。
141	ＬＰ８Ｇ	暗紫灰色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	小振りな擂鉢片である。内面に沈線、外面に頸れを設けて玉縁気味な口縁部を作り出す。櫛目は一単位が13条で数える。
142	ＬＰ９Ｇ	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定底径が12.6cmほどを測る。底部は回転糸切り未調整痕が残る。内面底部中央部から端にかけて一単位が11条の櫛目で刻み、周縁部を「つ」の字状に櫛目を廻らす。体部は櫛目を反時計廻りに刻む。内面の摩耗は僅かである。
143	ＬＰ９Ｇ	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定底径が15cmほどを測る。内面底部立ち上がり部が摩耗が著しい。体部の櫛目は一単位が13条を数え、反時計廻りに刻む。底部は回転糸切り未調整痕が残る。
144	ＬＰ９Ｇ	光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定口径が36.3cmほどを測る。ハの字状に開く体部の内外面に細かい凹凸が残る。口縁帯は折縁で、断面形が角状を呈する。櫛目は一単位が15条を数える。
145	ＬＰ９Ｇ	半光沢のある暗紫灰色に発色した鉄釉。にぶい黄白色。硬質。	推定口径34.4cm、器高13.6cm、推定底径15cmを測る。体部と口縁帯間は細く頸れ、内面に軽い陵を設ける。口縁帯の張り出しは弱い。口唇部内面に僅かに折り返しを設け、断面形がかぎ釣状である。櫛目は一単位が14条を数える。
146	ＬＰ９Ｇ	半光沢のある褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。やや軟調。	推定底径13.2cmほどを測る。底部内面と立ち上がり部は摩耗が著しく、内底部では無地まで摩り減っている。残存内面は櫛目が充填されている。底部は回転糸切り未調整痕が残る。
147	Ｌ区	光沢のある暗褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定底径13cmほどを測る。底部内面と立ち上がり部、底部外面に摩れと剝がれが多く見られる。櫛目は一単位が12条で、反時計廻りで刻む。
148	ＳＤ	半光沢のある褐色に発色した鉄釉。	推定口径32.4cm、器高12.1cm、底径13.6cmを測る。やや上げ底気味の底部より体部は器肉を減らしながらハの字状に開く体部に移行し、内面に軽い段をもち、張り出しの弱い口縁帯に続く。口縁帯の口唇部は玉縁状に丸く肥大している。櫛目は一単位が16条を数え、反時計廻りに15単位で内面体部を放射状に刻む。内面底部は、周縁部を一単位が「つ」の字状に廻り、空白の中央部を充填する。
149	ＬＰ８Ｇ	暗褐色に発色した鉄釉。淡黄白色。硬質。	推定口径37.1cmほどを測る。ハの字状開く体部面は凹凸が目立ち、口縁帯は折縁で、内面には強い陵を設ける。櫛目は一単位が20条を数える。

土　瓶

図番号	土器種	出土地点	量　目		特　徴　点
150	土　瓶	ＬＰ９Ｇ	口径　8	鉄釉。淡橙黄白色。	注口先端部と底部付近を欠損する。胴部は算盤玉状を呈し、最大径18cmを測る。上部外面は凍てによる斑点状はがれが目立つ。注口部と体部の接合部に三孔が穿けられている。
151	土　瓶	ＬＰ８・９Ｇ	最大胴部径15.5 底径　6	同　上	150の小型土瓶で、底部周縁部の三ケ所に小円形の粘土塊を付していよう。

炮焙・土鍋・香炉

図番号	出土地点	量　目	特　徴　点
152	ＬＰ９Ｇ	口径　36.7 器高　5.4 底径　33.1	ちぢれ底（注）を呈し、外周に一条の沈線と摩れが認められる。成形時に於ける擦痕と摩耗痕であろうか？体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部端を丸くする。外面の立ち上り部は１cmほどの幅を布等で拭きとっているのか滑らかで、やはり丁寧に拭きとりをしているのか？一ケ所に菊花の押印を施す。耳は三耳で、内底部と内面体部上半にかけて装着する。内底周縁部と体部の接合内面に指ナデを廻らす。底部外面は褐色。内面は褐色～淡赤褐色。体部外面は黒褐色を呈し、ススが付着する。（注）浜町屋敷内遺跡Ｃ地点より引用。群馬県埋蔵文化財調査事業団
153	ＬＰ９・10Ｇ	推定口径38.9 器高　5 推定底径35	ちぢれ底を呈し、外周部にはナデが施されている。外面の立ち上がり部は部分的に篦削りを行う。その上部には、やはり指頭状の窪みを呈し、口縁部から内面体部を横ナデする。内面はやや凹凸があるが滑かである。耳は三耳と考えられる。底部外面は褐色、内面が灰褐色、体部は外面黒褐色～灰褐色を呈している。
154	ＬＰ９Ｇ		同上のちぢれ底で、外周部にナデを施す。外面の立ち上がり部は篦削りが廻り、その上部に指頭状の窪みが認められる。体部はやや直立気味に内湾する。底部外面は灰白色、内面暗褐色、体部外面黒褐色でススが多く付着する。内面は暗灰褐色で、胎土は砂粒を多く含んでいる。一耳残存する。
155	ＬＰ９・10Ｇ		同上の形状を呈する底部で、体部外面に残る指頭状の窪み部は、雑なナデを施している。内底と体部の接合部分には、指頭によるナデが明確に廻る。底部内外面は褐色、体部内外面が黒褐色を呈し、外面にはススが付着する。
156	ＬＰ９Ｇ		ほぼ同上の形状を呈している。
157	ＬＰ９Ｇ		ちぢれ底を呈する底部で、体部外面はくの字状を呈し、内面は比較的滑かに内湾する。内底部はやや摩れている。残存する一耳も、内底部より体部上半にかけて装着している。底部外面は暗褐色、内面と体部内面は淡褐色、体部外面は黒褐色を呈し、ススが多く付着している。
158	ＬＰ８・９Ｇ	推定口径37.6 器高　5.5 推定底径33.5	多小凹凸のあるちぢれ底で、周縁部のナデは認められない。体部外面の指頭状の窪み部も雑にナデられている。底部内外が褐色～灰褐色、体部内面は灰褐色～黒褐色、外面黒褐色を呈す。耳は三耳装着されていよう。
159	ＬＰ９Ｇ		157と同一個体であろう。
160	ＬＰ９・10Ｇ	推定口径38 器高　5.2 推定底径34.4	ちぢれ底を呈する底部で、周縁部に軽いナデが廻る。外面体部の下半には篦削りを施す。また輪積みによる凹凸が残る。耳は二耳残存するが、やはり三耳であろう。底部外面は褐色、内面は褐色～灰褐色、体部内外とも黒褐色で、部分的に褐色の色調を呈している。
161	ＬＰ10Ｇ	器高　5.1	同上の底部形を呈す。体部内外面は横ナデを施す。底部外面は褐色、内面は灰褐色、体部内外面は灰褐色～黒褐色を呈す。
162	ＬＰ９Ｇ	器高　5.3	幅広の耳を装着する破片である。
163	ＬＰ10Ｇ	器高　5.2	耳の一部を欠損する破片で、体部外面、内面底部にもススの付着が認められる。
164	ＳＭ２	器高　6.7	底部と体部外面下半にちぢれ目（注）が残り、外面底部周縁部に軽いナデを施している。体部外面中位に明瞭な輪積痕を残す。この反対の内面には内陵（注）を設け、この内陵を挟んで耳が装着されている。底部外面は褐色、内面灰褐色、体部外面は黒褐色を呈し、多量のススが付着する。内面は灰褐色を呈している。（注）152と同じ

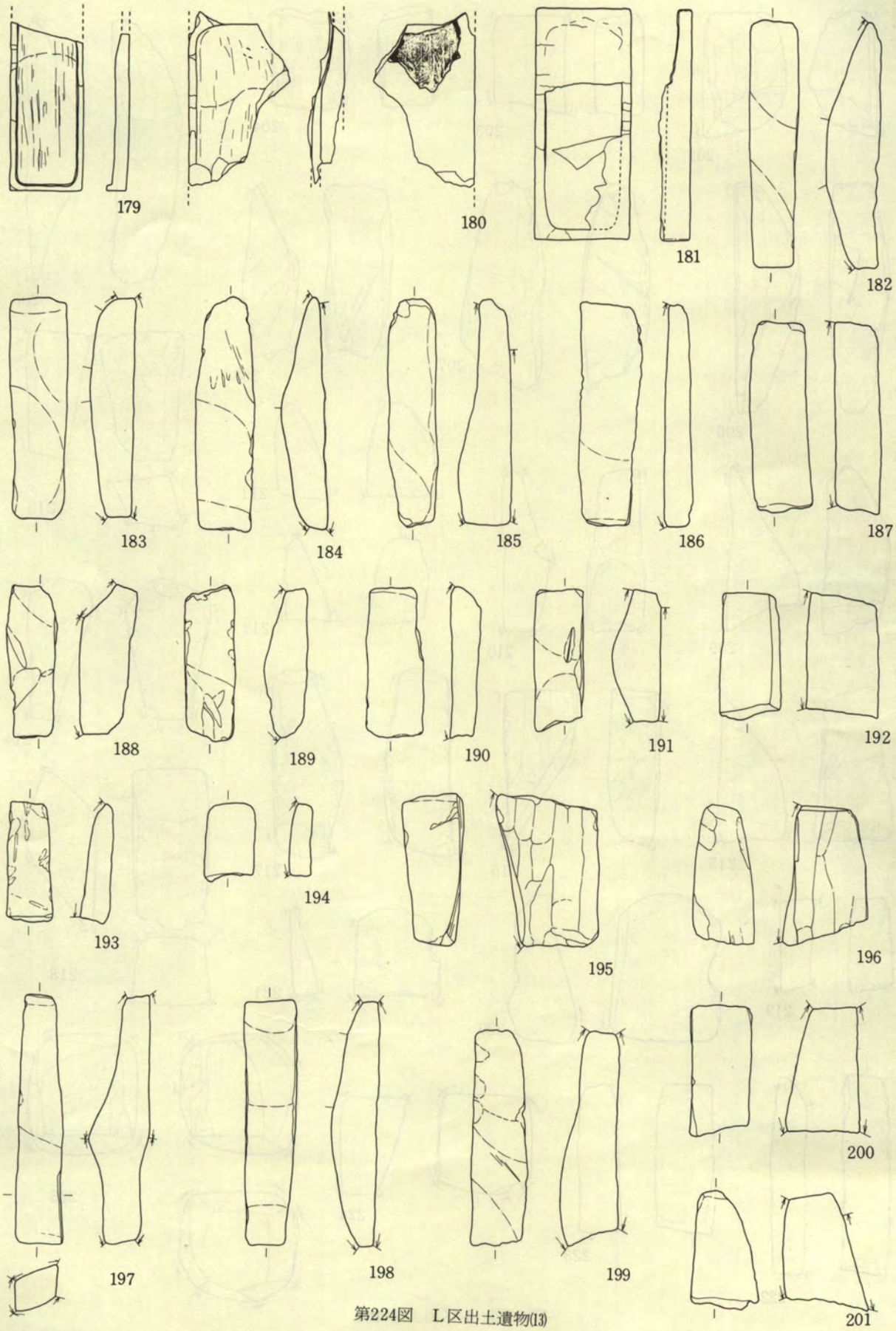
図番号	出土地点	量　目	特　　徴　　点
165	SM1	器高　6.6	ちぢれ底を呈する底部で、全体に摩れている。一部に僅かであるが板目状圧痕と考えられる段が認められる。体部外面は全面に横ナデを施す。耳は口縁部端から体部中位にかけて装着され、耳の環状部が中位に装着される部分に内陵が廻る。胎土には多量の砂粒が混入する。底部内外面、体部内面が褐色、体部外面が黒褐色を呈す。
166	LP10G	器高　5.3	ちぢれ底を呈する底部で、周縁部に軽いナデを廻らす。体部内外は横ナデを施す。底部外面褐色、内面淡黒褐色、体部内外面が黒褐色を呈す。
167	LP10G	器高　4.4	凹凸のあるちぢれ底で、やや器高が低い。色調は内外面とも灰褐色で、外面底部と体部の一部にススが付着している。
168	SE	推定口径39 器高　5.1 推定底径36.2	ちぢれ底を呈する底部で、安定した面である。体部は底部とほぼ同じ器肉で立ち上がり口縁部でやや肥大し、口唇部を丸める。体部内外面とも横ナデを施す。外面体部下半に指頭状の窪みが残る。耳は二耳残存するが、全体では三耳となろう。底部外面は褐色、内面淡褐色、体部内外とも淡灰褐色で、外面にススが付着する。
169	LO11G	器高　5	全体に淡褐色を呈する色調で、製作上の技法、形態は上記のものとさほど変化ないが、体部中位に3㎜ほどの孔を穿けている。焼成後のものである。
170	LP10G	器高　5.1	ちぢれ底を呈す底部で、外面体部下半に篦削りを施す。底部外面は褐色、内面と体部内外面は灰褐色～黒褐色を呈し、外面体部にススが付着する。
171	LP8G		やや舟底状を呈すと考えられるちぢれ底で、周縁部にナデを施す。体部は157・159に似る。底部外面は褐色、内面と体部内面が淡赤褐色、体部外面は暗褐色でススが付着する。
172	LP10G	推定口径36.5 器高　5 推定底径32	平坦で安定した器肉を保つちぢれ底で、外面体部下半に篦削りを廻らす。その上部に指頭状の窪みが中位まで残る。上半部から内面は横ナデを施す。底部内面は丁寧な拭きとりを施している為か、滑かである。底部外面褐色、内面と体部内面は灰白色～灰褐色、体部外面は黒褐色を呈し、多量のススが付着する。
173	LP10G	器高　5.4	底部外面が淡灰褐色、内面と体部内外面が灰褐色～黒褐色を呈する。
174	LP9G LO11G	器高　5.3	砂目（注）であろうか？底部外面に砂粒が多く付着している。外面体部下半は篦削りを廻らす。器面には輪積みによる凹凸が残る。底部外面は褐色～暗褐色、内面と体部内面は灰褐色、体部外面黒褐色を呈し、多量のススが付着する。（注）152と同じ
175	LP9・10G	推定口径33.9 器高　5.2 推定底径30.5	僅かであるが耳の装着部のはがれ痕が残る。底部外面は砂目と考えられ、全体に軽いナデを施す。外面体部下半に篦削りが廻り、その上部から内面は横ナデである。底部内面は丁寧な拭きとりを施し滑らかで、灰褐色を呈す。外面は淡褐色、体部は灰褐色～黒褐色である。
176	6M1＋2	推定口径34.9 器高　17	残存が悪い為に底部はちぢれ底なのか砂目底か判断できない。体部は5本の輪積と考えられ、口縁部を除いて指頭状の浅い窪みを体部外面に多く残す。口縁部はやや折縁状でハの字状に斜傾する体部から移行する。内面は横ナデを施す。器面全体は淡灰褐色を呈し、粗砂粒を含む。やや軟調。
177	LP9・10G	口径　36.3 器高　12 底径　19	上げ底の砂目底で、器肉は薄く2～3㎜である。体部は四本の輪積と考えられ、底部より外反して開き、内傾する平坦な口唇部に移行する。立ち上がり部と口縁部には横ナデ、その空間部には指頭状の窪みを多く残す。残存部での内耳の存在は認められない。底部と体部外面に多量のススが付着する。内面は灰褐色～黒褐色を呈し、全体滑かである。
178	SE	推定底径10.8	三足の円形香炉片で、底部は砂目底である。体部は横ナデが施され、外面に二条の沈線を廻らす。色調は内外面灰褐色～黒褐色を呈し、砂粒を含む胎土である。比較的硬質な焼成。

L区出土石製品について

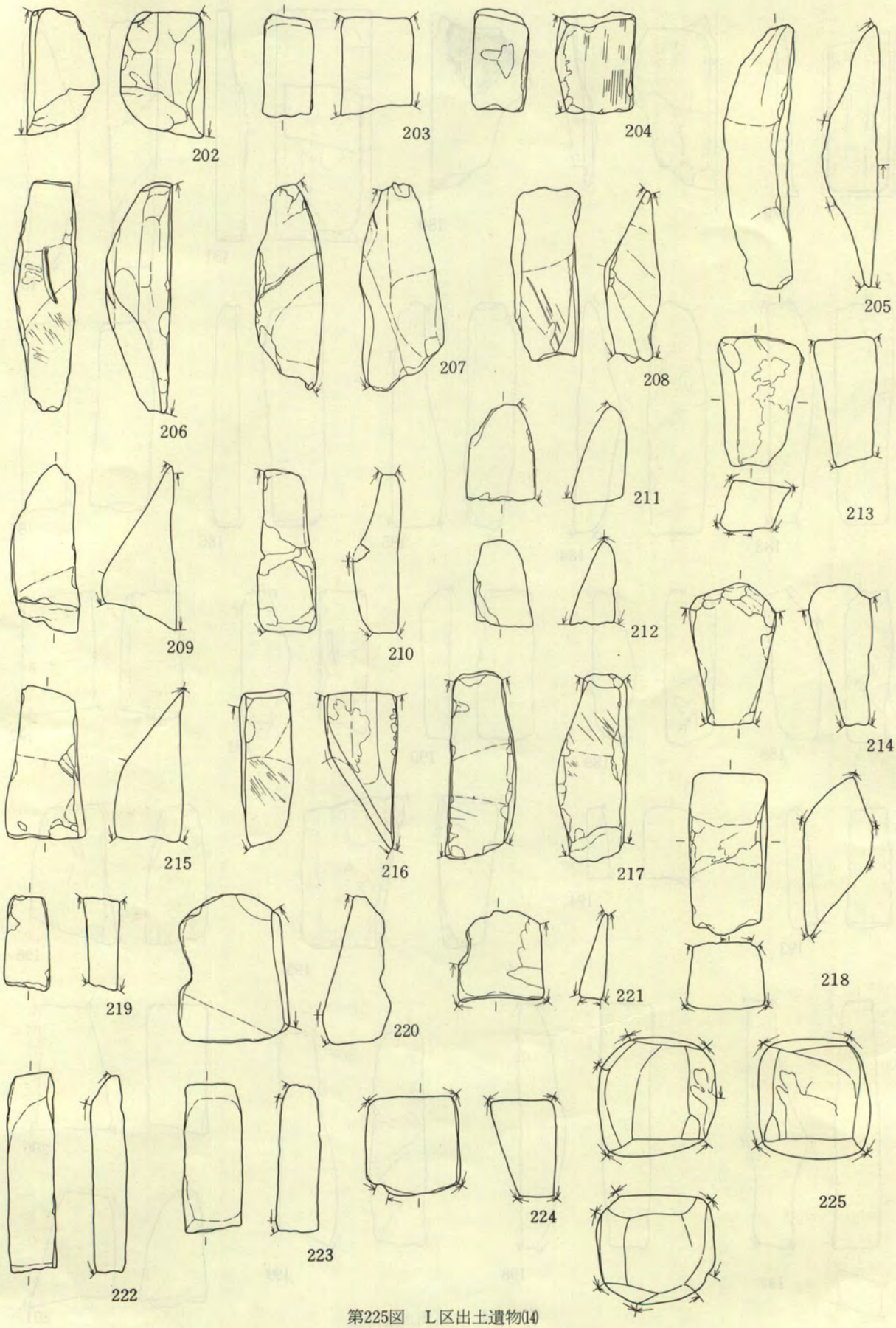
主なる石製品は、硯、砥石、臼、塔婆、板碑で、特に砥石が多量に検出された。

硯（第224図179～181）

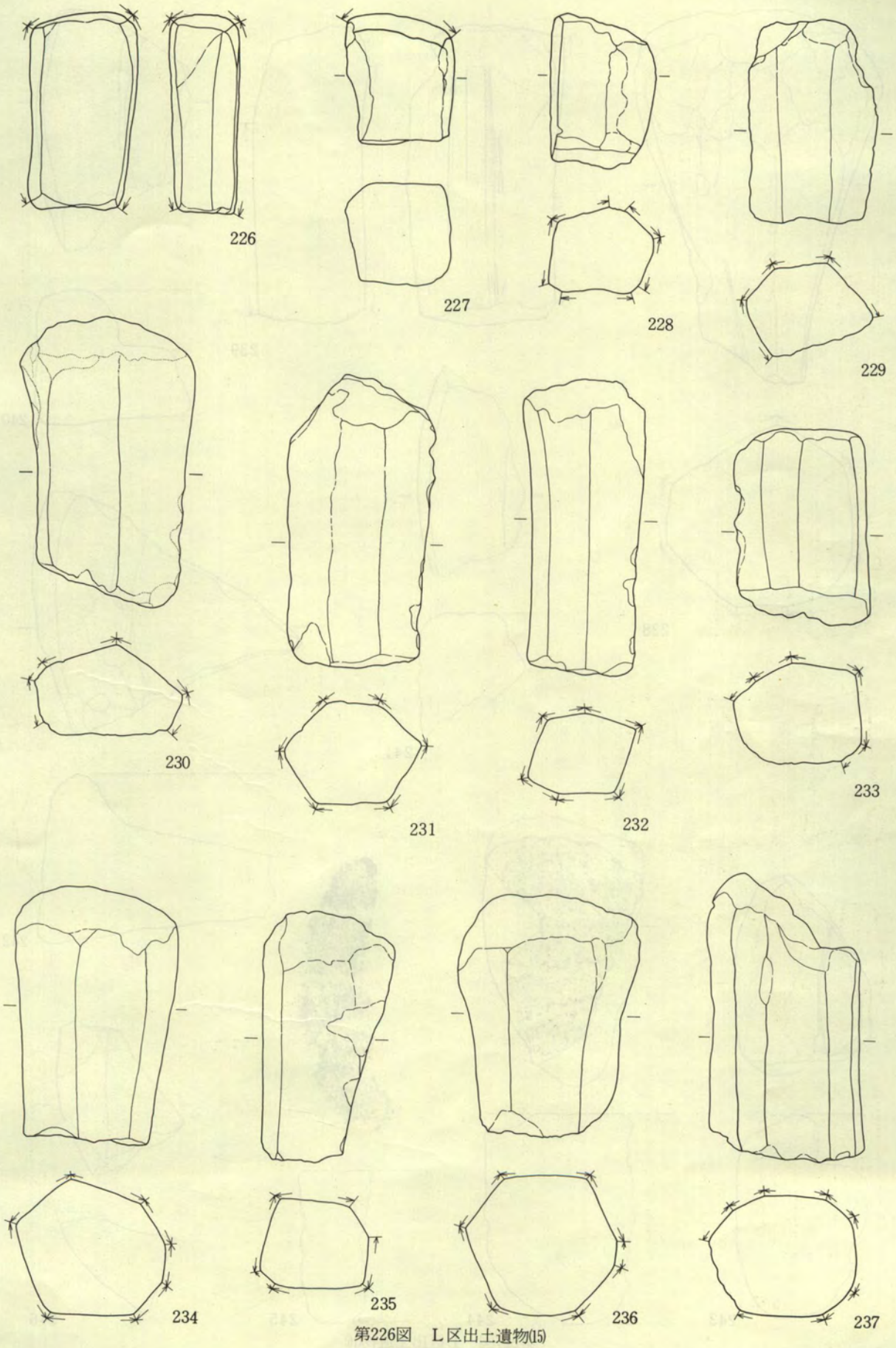
検出された三点は、SM3～4間の掘り込み覆土中より出土。



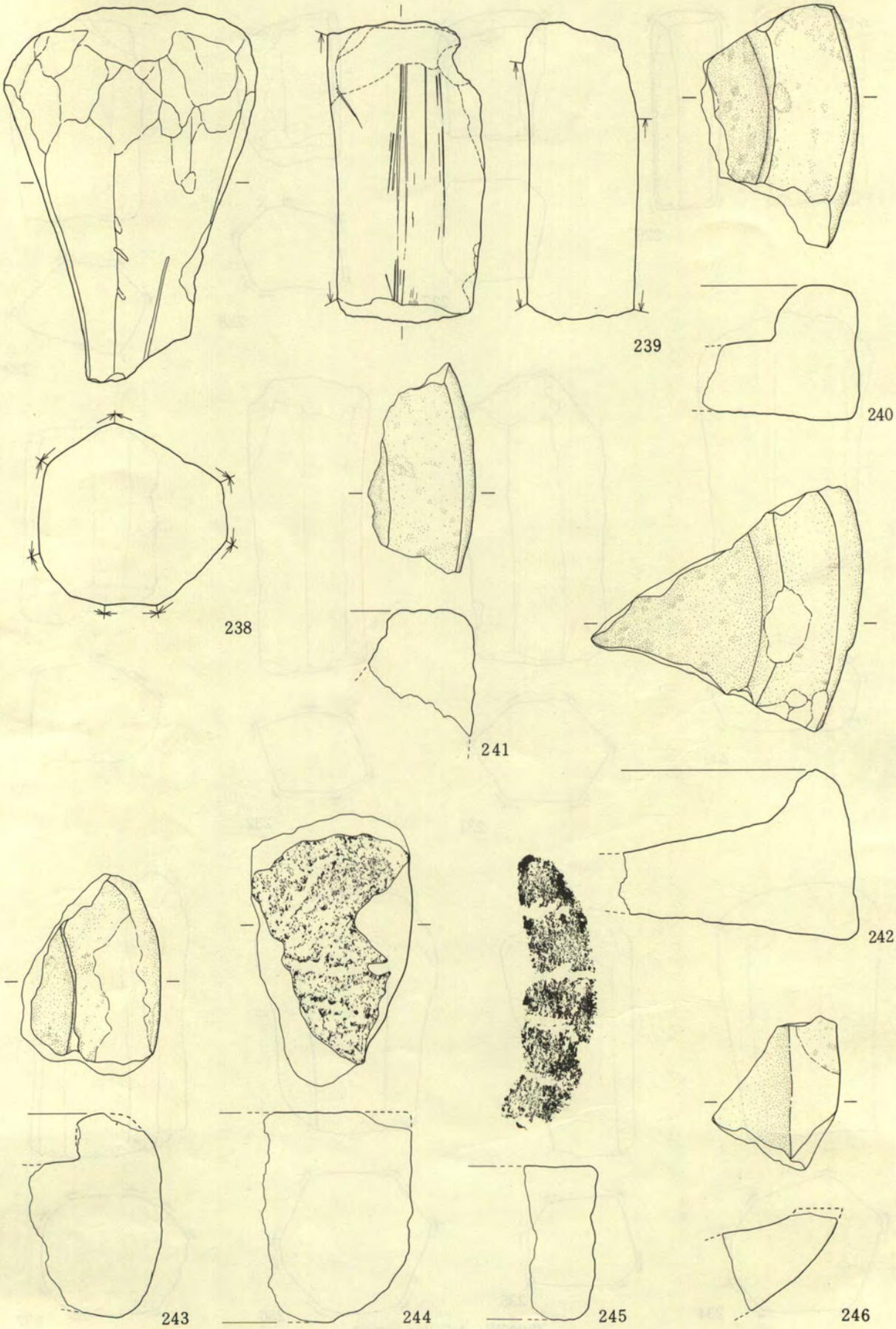
第224図　L区出土遺物(13)



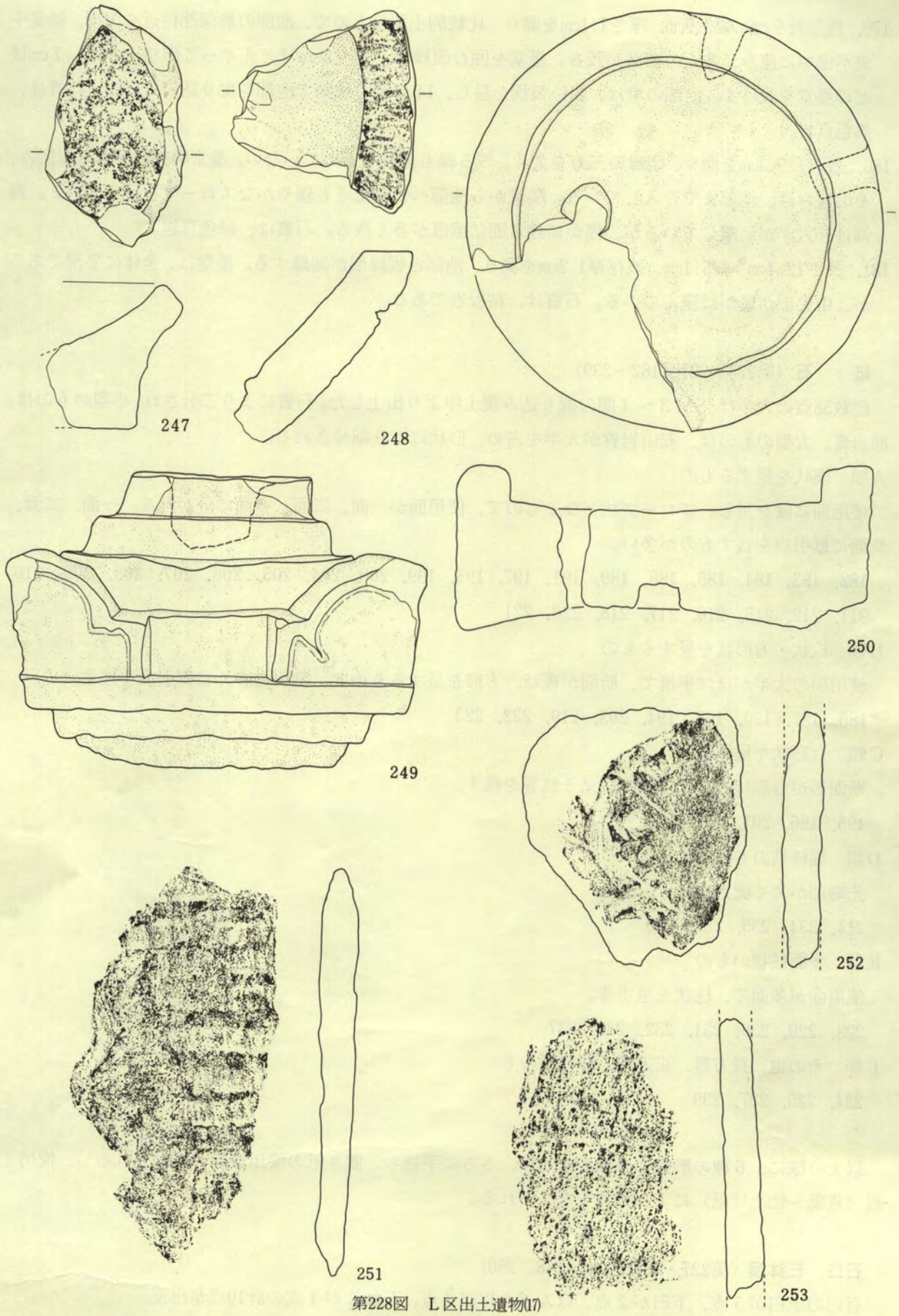
第225図　L区出土遺物(14)



第226図　L区出土遺物(15)



第227図　L区出土遺物(16)



第228図　L区出土遺物(17)

179. 残存長9cm、幅3.9cm、厚さ1.1cmを測り、比較的小型のもので、池部の最深部付近を欠損。墨堂中央が僅かに窪み、多くの擦痕が残る。墨堂を囲む硯縁は、3～4mmほどえぐって作り出され、7cmほどの墨堂を設ける。池部の境は、弱い弧状を呈し、14°ほどの傾斜で池部を掘り込んでいる。石質は、黒色頁岩。

180. 残存長9.3cmを測り、硯縁の三方を欠く。残る縁も全長を留めていない。墨堂中央部が大きく窪み、その窪みは、池部まで介入している。墨堂から池部への変化点も緩やかなスロープを呈している。裏面は、大半が剝離しているが、僅かに残る面に擦痕が多く残る。石質は、緑色頁岩。

181. 長さ12.4cm、幅5.1cm、残存厚1.2cmを測り、池部と硯縁部が剝離する。墨堂は、全体に平滑であるが、中央部が僅かに窪んでいる。石質は、粘板岩である。

砥　石（第224～227図182～239）

総数58点の大半は、SM 3～4間の掘り込み覆土中より出土した。石質により二分され、小型のものは、砂岩質、大型のものは、安山岩質が大半を占め、形状により細分される。

A類　楔状を呈するもの

使用面に陵を呈し、スロープ状となるもので、使用面が一面、二面、多面に分かれる。一面、二面、側面に鋸引痕を残すものが多い。

182. 183. 184. 185. 188. 189. 191. 197. 198. 199. 200. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 215. 216. 217. 218. 220. 221

B類　板状・方形状を呈するもの

使用面の大半がほぼ平滑で、断面が板状、方形を呈するもので、側面の多くに鋸引痕を残す。

186. 187. 190. 192. 194. 203. 219. 222. 223

C類　台形状を呈するもの

断面形が台形状を呈し、側面にノミ痕等を残す。

195. 196. 201. 202. 213

D類　棍棒状のもの

先端部が丸く肥大する。

214. 234. 235. 236. 238

E類　多面柱状のもの

使用面が多面で、柱状を呈する。

228. 229. 230. 231. 232. 233. 237

F類　その他、長方形、正方形、球体形のもの

224. 225. 227. 239

以上の様に、6種の形態に分類できるが、さらに手持ち、置き砥の使用形態で分類されるし、使用工程（荒砥～仕上げ砥）による分類も考えられる。

石臼、石鉢類（第227・228図240～248、250）

石臼の上臼が5点、下臼が2点、はんぎり片が2点、石鉢片が1点の計10点が出土。

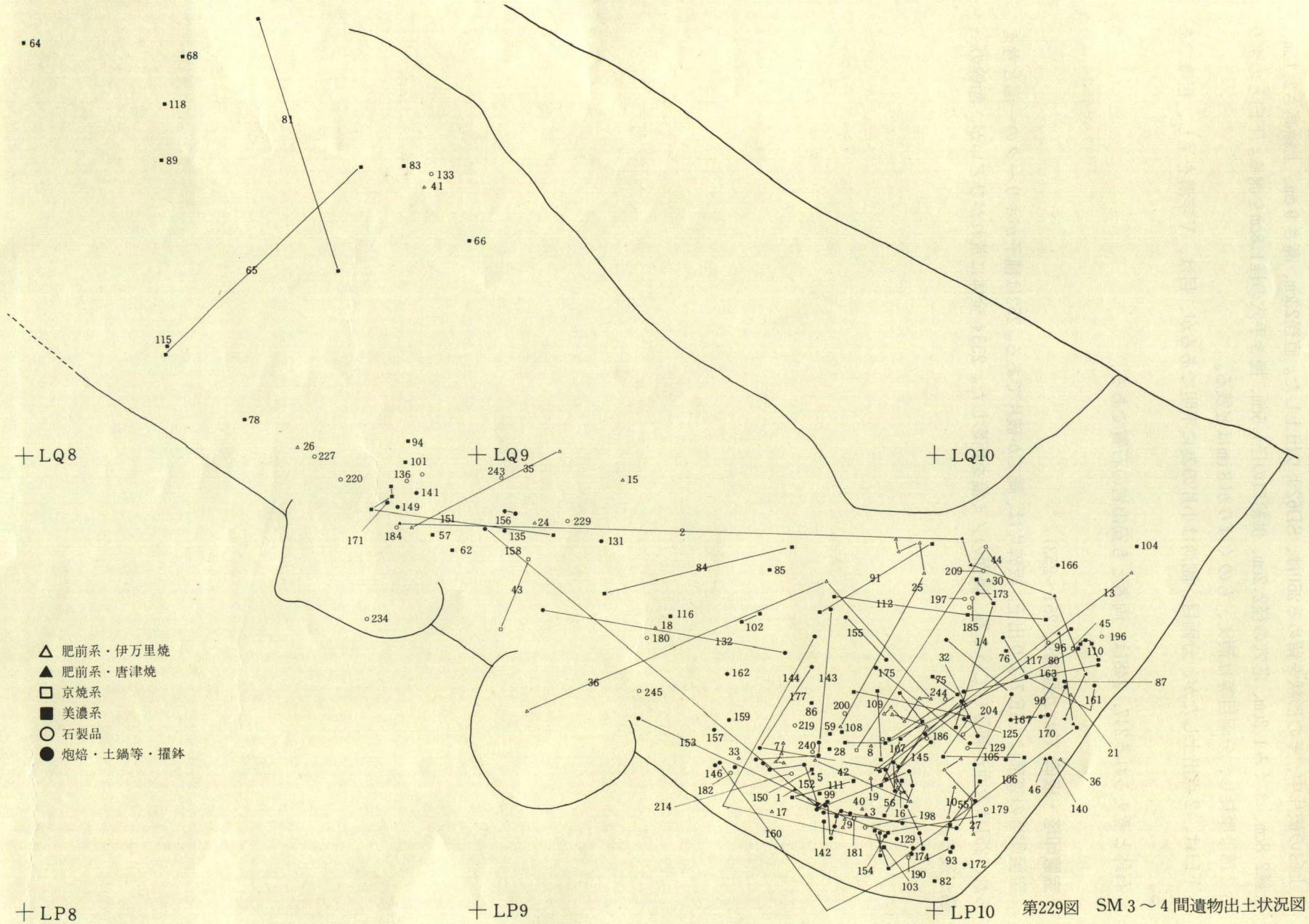
上臼の破片中、その形状を留める250は、SD62より出土した。直径23cm、高さ９cm、上縁高さ2.1cm、上縁2.8cm、ふくみ1.2cm、芯穴の径2.2cm、供給口の径1.5cm、挽き手穴の径1.8cmを測る。下臼とのすり合せ部は摩耗し、分画目等は消え、ものくばりが８cmほど残る。

下臼は、２点出土したが、分画目、副溝は小片の為に不明であるが、目は、Ｖ字溝を呈し、粗雑である。

石鉢と考えられる247．248は、両者とも安山岩の石質である。

宝篋印塔・板碑（第228図249．251～253）

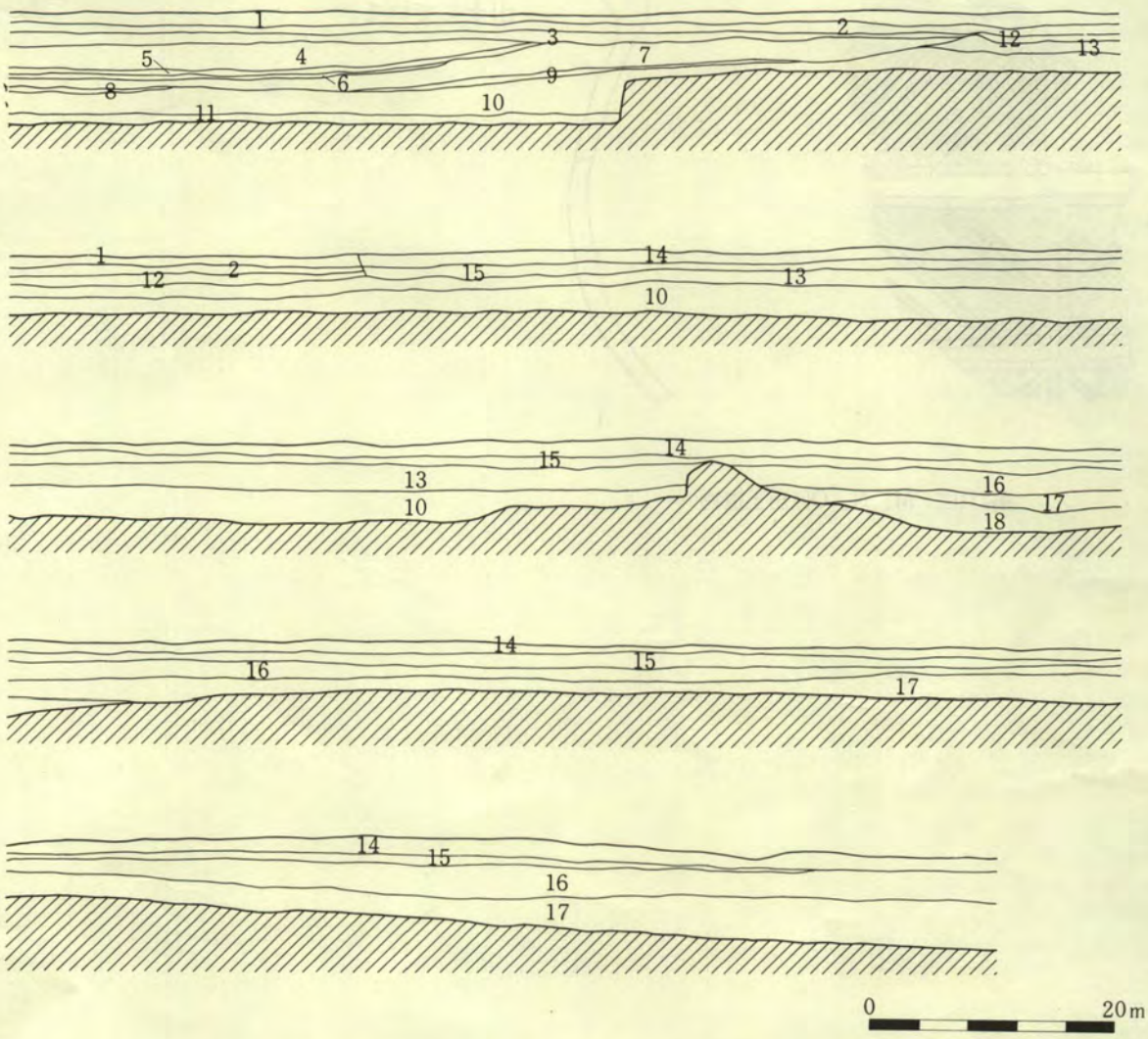
宝篋印塔の笠部は、SE７より出土。板碑片は、総てが破片である。252は種子がキリークの一部と考えられ、251は表面が剝離している為、裏面のノミ痕を拓影した。253も全体に荒れがひどいが、額線の一部が残る。



第229図　SM 3～4 間遺物出土状況図

(7) M．N．O区（第230、231図）

L区の大主1号線東側より、神沢川間は、調査区北側にトレンチを設け、遺構の確認を行った。しかし、水田、桑畑下は、砂層と粘質土が互層気味に堆積し、下層は礫層に続く状況で、僅かに砂層中より土器片が出土した。



第230図　M、N、O区北壁土層図

M．N．O区北壁土層説明

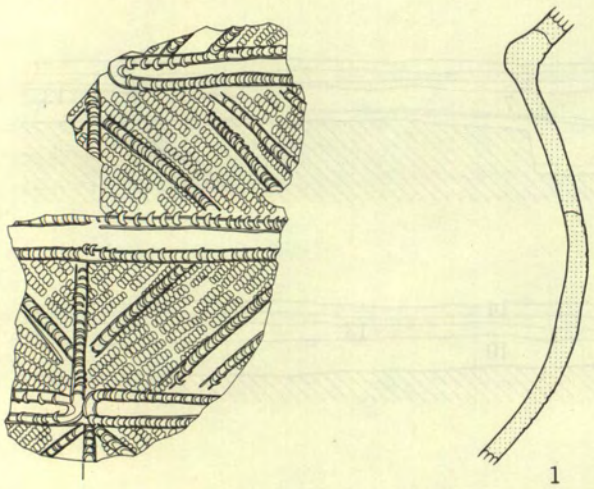
1．2	灰暗褐色粘質土　現水田	10．11．16	暗褐色砂質土
3	暗褐色粘質土	12．15	黒色土
4	3層より暗い暗褐色粘質土	13	褐色砂質土
5．8．18	砂層	14	耕作土　現桑畑
6	黒褐色粘質土	17	暗褐色土
7	暗褐色砂質粘質土		

M・N・O区出土遺物（第232図）

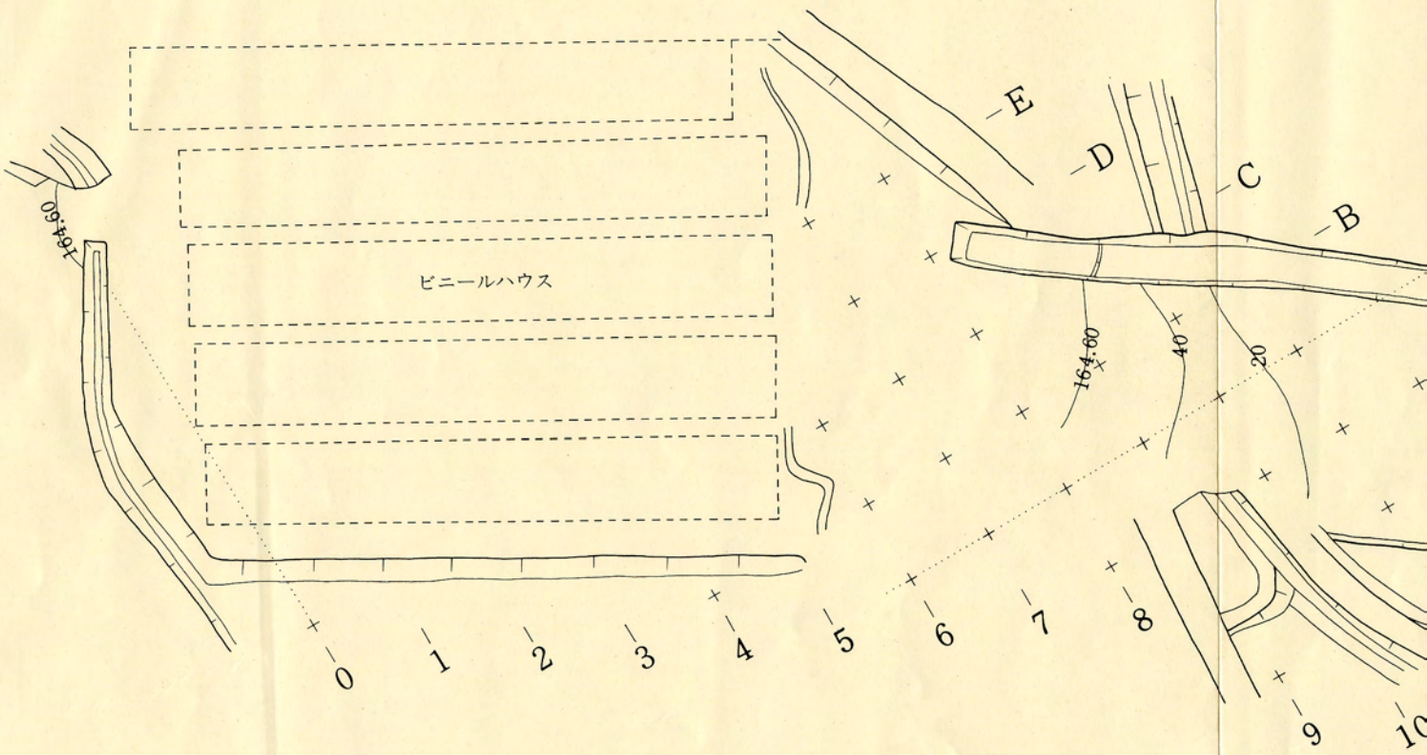
1．内湾する胴部より、くの字の頸部を設け、口縁部へ移行する破片で、褐色～黒褐色の色調を呈し、胎土中に繊維を含む。文様は、頸部と胴部に二ヶ所、横位の無文帯を挟んで、爪形文を伴う平行沈線文を上下に並走させ、空間部を縦位に同様の平行沈線文を垂下させ、さらに、区画内を斜位に施し、上下、左右が対称となる文様を描く。地文も同様に、文様と対称となるように、RL と LR を斜位に転がしている。B群2類に比定されようが、羽状縄文の地

文を施し、菱形文の集合的モチーフは、有尾糸土器に認められ、黒浜式土器との差異が指摘される。基本的に、胎土中に繊維を含まない土器が有尾糸土器とされており、現時点に於いては、B群2類として分類した。

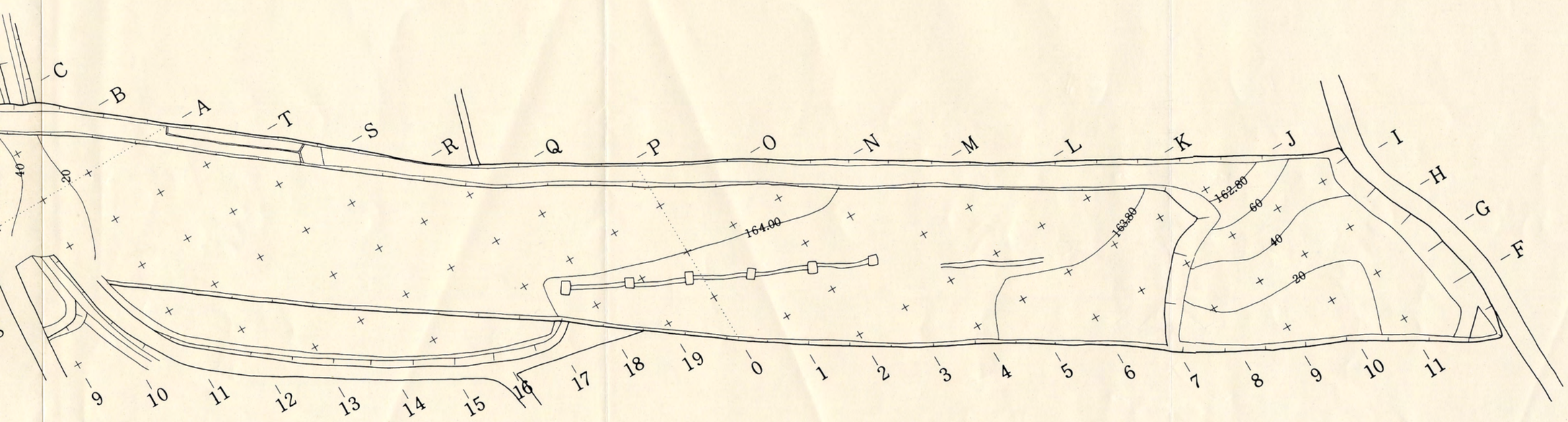
この外に、中期加曾利E式、土師器の小片が出土している。



第231図　M、N、O区出土遺物



ビニールハウス
164.60
164.60
40
20
E
D
C
B
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10



第232図　M・N・O区全体図